



Title	津軽英麿日記（明治37年）の紹介と翻刻
Author(s)	小野, 博司; 矢嶋, 光; 久野, 洋 他
Citation	阪大法学. 2026, 76(2), p. 283-325
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106140
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

津軽英麿日記（明治37年）の紹介と翻刻

小野博司・矢嶋光・久野洋・的場かおり

1 津軽英麿とその日記

本稿は、弘前市立弘前図書館に所蔵されている津軽英麿（1872-1919）の明治37（1904）年の日記を紹介、翻刻するものである。この日記は、陸奥弘前津軽家当主（伯爵）承昭（元弘前藩主）の養嗣子である英麿が、約17年に及ぶ留学生生活を終えて帰国した直後の日常を記したものである。わずか半年の記録だが、長年にわたり海外で自由を謳歌してきた英麿が、一転して華族子弟として多忙な日々を送ることになり、ときに自身が置かれた環境（華族社会、津軽家）に戸惑い、反発する姿がドイツ語を交えて描かれている。長期海外留学から帰国した直後の華族子弟の日記はこれまで知られておらず、貴重なものといえる。

英麿は、明治5年2月（1872年4月）、元左大臣近衛忠房の次男として生まれた。⁽¹⁾ 兄は貴族院議長などを務めた篤麿、姉は篤麿に次いで貴族院議長となった徳川家達の妻泰子である。わずか1歳で父忠房を喪った英麿は、元関白の祖父忠熙の手で養育されることになり、明治10（1877）年5月には承昭の養嗣子となった。系図上では津軽家が近衛家の支系に当たり、承昭（父は熊本藩第十代藩主の細川齊護）に嗣子がおらず、妻の尹子が英麿の叔母であったため、英麿が津軽家の跡継ぎとされたのである。⁽²⁾⁽³⁾

明治18（1885）年9月、東京師範学校附属小学校高等科を卒業した英麿は、ドイツで学んでいた兄篤麿からの強い勧めもあり、忠熙の反対にもかかわらず留学を決意した。翌年11月、異母弟鶴松とともに横浜を出発し、以後17年超、ドイツを中心にヨーロッパ社会の中に身を置いた。特に1895年11月に入学した王立フリードリヒ・ヴィルヘルム ベルリン大学（以下、「ベルリン大学」）⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾

(Königlich Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin) 法学部には約 8 年在籍⁽⁹⁾、自身の境遇から着想を得た博士論文 (*Die Lehre von der japanischen Adoption* 〈「日本養子論」〉) の執筆に取り組んだ⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。

英麿は、「思想的にも現実的にも、あまりかけはなれてしまっていてゐるらしく十五年間を隔って居た家庭に戻って行くには、さまざまな抵抗が感じられた⁽¹²⁾」ため留学期間を延長し続け、帰国催促にも応じなかった。しかし、1903年10月、篤麿危篤の報を受け、——つまり、津軽家の跡取りとしてだけでなく、文麿⁽¹³⁾ (12歳) の事実上の後見人 (「特にきびしかった叔父さま」⁽¹⁴⁾) としての役割を期待されて——ついに帰国の途についた。博士号は取得できなかったが、世界的な比較法学者ヨゼフ・コーラー (Josef Kohler) の門下で、親友の池田龍一の協力を得て、*Die Lehre von der japanischen Adoption* は1903年に Mayer & Müller より刊行された⁽¹⁵⁾。

帰国後は、いくつかの大学で「法制史」(早稲田大学、法政大学…ローマ法、慶應義塾大学…法制史)⁽¹⁷⁾ を講じ、明治38 (1905) 年 9 月にはかつて篤麿が院長を務めた学習院の教授 (翌年 4 月講師) となった。以降、宮内府書記官⁽¹⁸⁾ (宮内府大臣官房調査課長)、李王職事務官 (李太王附)⁽¹⁹⁾、式部官などを歴任し、大正 5 (1916) 年 8 月には前月に亡くなった承昭の跡を継いで津軽家の当主になった。大正 6 (1917) 年 7 月に官を辞した英麿は、大正 7 (1918) 年 7 月に貴族院議員に当選したが、翌年 4 月に脳溢血に倒れて亡くなった。没年47歳。津軽家は養嗣子である義孝⁽²⁰⁾が継いだ。

筆者らが英麿に注目したのは、養老令 (令義解)⁽²¹⁾ のドイツ語翻訳事業の実態解明に取り組んだことがきっかけである。養老律令の翻訳は21世紀初頭に元ルール大学ボーフム教授の日本古代史研究者ハンス・デットマー (Hans Adalbert Dettmar)⁽²³⁾ が完成させたが、実は約100年前にコーラーによって計画されたものであった。かねてより日本法研究のために律令の翻訳を欲していたコーラーは、旧知の東京帝国大学法科大学教授である穂積陳重に協力を仰いだ⁽²⁴⁾。そこで穂積は、「比較法制史の研究の一つとして」英麿⁽²⁵⁾と池田⁽²⁶⁾にこれを依頼し、⁽²⁷⁾「相談相手にと」自身のもとで東洋法制史を学んでいた廣池千九郎を推薦した⁽²⁸⁾。彼らは明治38年6月から英麿が渡韓する明治40 (1907) 年末まで「毎週幾度かづつ日を定めて」(「大体一ヶ月に二度開かれ、その中一度は穂積博士が出席⁽²⁹⁾」)⁽³⁰⁾これに取り組む、養老令 (令義解) 全30篇中 9 篇の翻訳を完成させた⁽³¹⁾⁽³²⁾⁽³³⁾⁽³⁴⁾。

原稿が散逸したと見られることから、この事業は長く「伝説」扱いされてきたが、利光三津夫が麗澤大学研究部（現モラロジー研究所）所蔵の廣池千九郎関係資料（「『覚書』一冊が附された広池博士手沢本「赤本令義解」十冊」⁽³⁵⁾）を調査し、翻訳作業が実際に行なわれていたことを明らかにした。筆者らは利光の論考に触れ、一方通行ではない日独法学交渉史（「学問的交流」）の一齣としてこの事業に関心を寄せていたところ、偶然、弘前市立弘前図書館に英麿の日記が所蔵されていることを知り、読解に着手したのである。

弘前市立弘前図書館に所蔵されている英麿の日記は、明治37年（2-7月）、同41（1908）年（2月）、大正3（1914）年（1月）、同4（1915）年（1-10月）、同6年（1-10月）、同7年（1-4月、10月）、同8（1919）年（1月）のものである。このうち精読したのは、翻訳事業の前後の明治37年および明治41年の2年分であるが、とりわけ英麿の内面がよく描かれている明治37年日記に関心を持った。日記の中で彼は、自身の感情を表現する際にドイツ語を用いているが、このようなコードスイッチングは、帰国後にアデライン・ランマン夫人（Mrs. Adeline Lanman）宛の書翰の中で自身が日本社会に適合できないことを訴えていた津田梅子——彼女の伯母初子は、英麿の義兄徳川家達の生母である——と通じるものであろう。英語で自身の感情を表現した梅子同様、英麿のアイデンティティは、外国（ドイツ）において形成されたと推測される。⁽³⁶⁾

8つ折り版のレッツ（Letts）の日記帳に書かれた明治37年日記は、上海到着後の2月15日に始まり、皇后に拝謁した7月24（25）日で終わっている。この間、英麿は大変活発に活動している。まず、「父上より三十六年度予算調査受取り財政整理ノ依頼ヲ受ク」（4月20日条）との記述に象徴されるように、還暦を超えた承昭に代わり、帰国早々家政を取り仕切るようになった。加えて、篤麿亡き後の近衛家から頻繁に相談を持ちかけられて、商議員として家政運営に深く関与するようになった。⁽³⁷⁾さらに東亜同文会の評議員就任や櫻田倶楽部への入会など、篤麿が担っていた役割の一部を引き継ぐことになった。⁽³⁸⁾他方で、多忙であるにもかかわらず英麿は、留学中に知り合った人々に加え、上流階層の人々と連日のように交流を深めた。特に親しかったのはベルリン大学への留学経験もある柳澤保恵伯爵で、たびたび酒席をともにしている。⁽³⁹⁾こうした昼夜を分かたぬ精力的活動を通じて、華族階層を中心に、英麿は瞬く間にネットワークを広げていったのである。⁽⁴⁰⁾

しかし、表面上は津軽家嗣子または近衛篤磨の弟として、日本社会（華族社会）にスムーズに順応したように見える英麿であるが、14歳から31歳までのドイツ生活を通じて培われた価値観がこれとの間で摩擦を生じることは自然なことであった。英麿を最も憂鬱にさせたのは将来の進路である。英麿は、穂積の勧めにより、*Die Lehre von der japanischen Adoption* をもってベルリン大学及び東京帝国大学において博士号を取得することを目指していた。そしてこれが実現した暁には、「華族社会は勿論、又衆議院議員の件も今の処にて余り希望不仕」、「帰朝の後は充分日本の事情に通暁する迄余り政事社会には口を入れず、専ら学問に従事」し、「学習院及び国の東奥義塾等の為尽力」するつもりであった。⁽⁴⁶⁾しかし周囲の期待から、「政界に向けて出発するか、或は学究を続けるか、未だ確かな決心はな」⁽⁴⁷⁾いまま帰国せざるをえなかったのである。華族子弟として充実した日常を送る一方で、大学での講義を引き受けたり、令義解の独訳に熱中したのも、学究への未練である。⁽⁴⁸⁾

思うに任せないのは、私生活も同じであった。それが、承昭の長女理喜子との結婚問題である。明治30（1897）年6月には戸籍上、理喜子の婿養子とされていた。しかし英麿は、「予が津軽家に養子となりし際には、理喜子と結婚の予約なし。後に戸籍面を婿養子と訂正したるは予の知らざる所なり。結婚は適意の婦人にあらざれば為す能はざるものにして、遺憾ながら理喜子は予が意に適せざるの婦人なり。仮令結婚の準備あるも予が諾せしものにあらず、之を強るは無理なる処置なり」⁽⁴⁹⁾と彼女との結婚を拒絶した。彼女と外出した日の記事に、「日本婦人ノ役ニ立タヌ事ヲ感セリ」（5月17日条）との感想が記されていることから、英麿の価値観（女性観）が、「日本婦人」（理喜子）とは合わなかったことがわかる。

とはいえ、3歳年下の理喜子との結婚は津軽家中が当然視するところであった。帰国拒否に加え、彼らの目には英麿の言動は、津軽家嗣子らしからぬものと映ったに違いない。英麿は、この問題について当初は曖昧な態度を見せていた。しかし、義姉の近衛貞子と姉の徳川泰子からしつこく迫られたことで、⁽⁵⁰⁾「重厚・寡黙・悠揚迫らなかつた」彼もついに感情を爆発させ、「Abscheulich weibliche Japanerin, derb ungelenkig hässlich, hässlich, ungebildet Pfui Pfui!」⁽⁵¹⁾（7月24日条）という強い侮蔑の言葉を日記の中で浴びせかけたのであった。ドイツ生活を通じて培われた英麿のアイデンティティが、「家」に縛られた結

⁽⁵²⁾ 婚という、華族子弟として当然の義務を明確に拒絶したのである。⁽⁵³⁾

明治期の華族（子弟）の日記で翻刻されているものはいくつかあるが、⁽⁵⁴⁾ 其中で英麿の日記は、これまで文麿の回想⁽⁵⁵⁾ でしか確認できなかった篤麿亡き後の近衛家の混乱ぶりや、洋行エリートの日社会に対する戸惑いと反発を記録している点が特徴である。政治史、文化史にとって重要な資料であると考えられるため、全文翻刻して紹介することとした。日本語部分は小野、矢嶋、久野の3名が、ドイツ語部分は的場が主に担当した。⁽⁵⁶⁾⁽⁵⁷⁾

翻刻では、抹消文字には二重線を付し、訂正文字は二重線を付けて、訂正後の文字を記した。ただし、別日に誤って記して抹消した文などは省略した。確信が持てないものは〔カ〕とした。日付と曜日は日記によったが、誤っていることが明らかな場合は〔〕で正しい日付と曜日を記した。仮名遣いと傍線は原文のままであるが、旧漢字は一部の人名等を除いて新漢字とした。また読みやすさを考慮して、適宜句読点を付した。ドイツ語による記述には、〔〕の中に翻刻者による訳を補っている。翻刻にあたっては、原文で改行となっている部分は追いつ込みとした。校註は人名を中心にを行い、誤記や不足している部分は〔〕で補った。特にことわらない限り、校註には『官報』、『職員録』、『人事興信録』、青森県人名事典編さん室（主幹：尾崎竹四郎）編『青森県人名大事典』東奥日報社（1969年）、秦郁彦『日本近現代人物履歴事典〔第2版〕』東京大学出版会（2013年）を使用した。（文責：小野博司）

2 津軽英麿日記（明治37年）

2月15日（月）

Chinas. 大晦日。Brief an Saito p.S.S Siberia [シベリア号經由で齊藤宛の手紙]。午前東和洋行へ行き部屋ヲ見ル。部屋代食事付3.60\$とノ事。明朝移ル事ニ決ス。Brief an B [(B宛の手紙)]。午後五時ノ切ノ間ニ合ハズ。戦報別ニ変リシ大事ナシ。亜米利加ニテ 8 million Doller 即 16 million 円ノ寄付金申込アリタリトハ盛ナル哉。

2月29日（月）

天気。夜中の雨止む。目悟むれば箱根山脈ヲ既ニ過ぎぬ。国府津ニテ柳澤長岡

資 料

〔護美〕⁽⁵⁸⁾子、細川〔護成〕⁽⁵⁹⁾侯及檜磨君出迎フ。神奈川ニ於テハ飯田⁽⁶⁰⁾巽、本多庸一⁽⁶¹⁾、工藤則勝等⁽⁶²⁾ノ諸氏来ル。品川ニテハ又赤石定三⁽⁶³⁾、飯田旗郎氏等⁽⁶⁴⁾アリ。停車場（新橋）着ハ午前九時半頃ナリシ。父上、りき子、寛子其他親戚旧藩諸氏友人数多出向フ。二階上ニテ休息ノ上馬車ニテ帰宅。
昼ニハ徳川〔家達〕⁽⁶⁵⁾公爵、細川公爵⁽⁶⁶⁾、長岡子爵、細川護立、公爵近衛未亡人貞子⁽⁶⁷⁾、光蘭様来客。⁽⁶⁸⁾晩ニハ内ニテ祝宴。

3月1日（火）

天気。今日誕生祝ノ為メ在宅。~~来客数一~~⁽⁶⁹⁾
訪問者数多アリ。

3月7日（月）

天気好晴。朝九朝⁽⁷⁰⁾半頃文麿君来ル。食事中本町停車場へ汽車ヲ見ニ行ク。
~~十時一~~
十時半工藤行幹⁽⁷¹⁾来訪。清水信重（近エ家々扶）、大道寺〔族之助繁禎〕⁽⁷²⁾、津軽来訪。吉蔵（元ノ車引）来ル。那須大郎⁽⁷³⁾資穀氏来訪。東上婆さまナリ。
工藤行幹ヨリハ⁽⁷⁴⁾ノ話アリ。
近衛公百日祭迄ハ公会ニ出デザル故ト辞ス。

3月8日（火）

雨。今日父上ト池上ノ梅ヲ観ントセシモ雨天ノ為延引。
午前飯田旗郎氏来訪。全日在宅、写真ヲ見ル。

3月9日（水）

好晴。午前十時徳川公爵来訪。泰子様ノ手紙持参。
夫レヨリ父上ト細川侯爵方へ行ク。長岡子爵、細川宏子様等⁽⁷⁴⁾アリ。洋食御馳走。
三時頃辞シテ二條〔基弘〕公爵及前田〔利為〕侯爵⁽⁷⁵⁾訪問。二條公ニハ一寸ト談話。前田侯爵不在、母上〔(朗子)〕⁽⁷⁶⁾ト談話。酒出。
長岡氏ヨリ東亜同文会ノ話アリ。評議員トナルノ承諾ヲナス。

3月10日（木）

曇。荷物受取ノ為メ十時三十五分^{横濱}税関ニ赴ク。連ハりき子、のり子ト檜麿君ノ三人ナリ。先ツ同地 Grand Hotel ニテ昼食。夫レヨリ Lane Crawford ニテコップ、烟草、ヒヤノの蠟燭、傘其他種々ノ買物ヲナシ、近江屋ニ於テ買物ヲナシ、公園ニテ連ト分レ税関ニ赴ク。税関長ハ佐藤友太郎氏⁽⁷⁷⁾ノ書状ヲ見テ非常ニ親切ニ取扱ヒ、荷物ハ開カズシテ通過ノ事ニナル。其レヨリ停車場ヘ至リ Restaurant ニテ連ト合。四時三十五分ノ汽車ニテ帰京。車内満員。新橋傍博品館ニ於テ買物。銀座通ヲ経テ京橋ヨリ人力車三十五錢。帰邸。

3月11日（金）

雨。父上等ト池上ノ梅ヲ見ントシテ雨天ノタメ再ビ延引。

終日在宅。礼服注文見合せ。

午後、⁽⁷⁸⁾齊藤〔璉〕来リ。婚姻ノ談話アリ。答フルニ暫時考フベキヲ以テス。

3月13日（日）

曇。雪。朝、帝国独逸学会幹事穴戸深蔵⁽⁷⁹⁾ナル人柳沢伯ノ名刺持参シ来ル。柳沢伯来レルモノト間違ヘテ大笑。

午後、別段記スベキヲナシ。近衛家ノ家憲調査ニ取掛ル。

午後五時半頃侯爵前田利為氏来訪。直チニ帰ル。

3月14日（月）

晴寒。~~午前十一時外出。~~午後二時外出。徳川達孝⁽⁸⁰⁾、松方〔正義〕⁽⁸¹⁾伯、一条〔実輝公爵〕、九条〔道孝公爵〕、大倉、大岡等ノ諸家ヲ訪フ。貴族院官舎ニテ岩瀬ヲ見舞。同人喜限ナシ。夫レヨリ明治病院ニテ鳥井春洋⁽⁸²⁾ヲ訪フ。同人案内ニテ深川亭ニ飲ム。寺田〔織尾カ〕⁽⁸³⁾医学士モ同席ニアリ。十二時頃帰館。

留守中法学士平沢均⁽⁸⁴⁾ニ来リ。来ル二十日、修養舎へ来リタレヨト依頼ス。~~之ヲ諾ス。~~翌日之ヲ諾ス。

~~穂積ノ宅訪ヘリ、留守。~~

3月15日（火）

好晴。父上ノ御供シテりき子、のり子等ト大森ノ梅ヲ見ル。

汽車ハ午前十時三十分ニ発シ三時二十五分ノ汽車ニテ帰ル。銀座ニ於テ博品館

資 料

其他ノ店ニテ買物。

留守中独乙公使ワルライ伯⁽⁸⁵⁾来訪。夕刻又十九日ニ招待シ度キ由申来ル。
柳沢伯ノ献議、宇都宮⁽⁸⁶⁾〔鼎〕ノ賛成ニテ日本^{〔ママ〕}人倶楽部入会可決申来ル。

3月16日（水）

晴。訪問、松平直亮⁽⁸⁷⁾、。。。。。

小石川別邸ヲ見ル。隠宅適当！

3月17日（木）

晴。終日在宅。昼頃釣ヲ試ミ鯉一匹ヲ得。

齊藤ト談話ノ筈ナリシガ珍田⁽⁸⁸⁾〔捨巳〕ヨリ電話ニテ檐磨君ノ㊦ニ付キ話度アリ
トテ呼ビ来ル為メ行ク。

3月18日（金）

雨雪。近衛忠熙公七年祭⁽⁸⁹⁾ニ付、午前九時津梁院ニ到ル。

九時半勅使来り正一位ヲ贈ラル。墓前ニ参列後、孝^廣徳寺ニ至り、十一時ヨリ法事。一時ニ至り昼食。

来会者、徳川公爵夫婦、近衛家一同、常磐井堯熙ノ外、来賓ナシ。

二時参内御礼ニ赴ク。

帰途、海軍省ニテ宇都宮、東京支廠ニテ柳沢伯、日本新聞社ニテ陸実及赤石定蔵ヲ訪ヒ五時帰邸。

夜八時ヨリ齊藤来り財政ニ就キ談話アリ。

齊藤、珍田ト談話ノ結果、珍田、近日三ノ宮^{〔三宮〕}⁽⁹⁰⁾〔義胤〕ト相談スル㊦トナル。

3月19日（土）

雨。寒厳シ。午前、岩川友太郎氏⁽⁹¹⁾及赤石定蔵氏相続キテ来訪。

午後十二時半頃出門。独逸公使ノ午餐ニ行ク。会食者四人。四時頃帰邸。

3月20日（日）

晴。午前、大橋光雄来ル。工藤則勝氏二十三日京都へ行ニ付暇乞トシテ来訪。

今日ヨリ兵卒五十名宿泊ノ筈ニテ準備大取込。

穂積〔陳重〕、独乙公使ノ両者ニ著述ヲ郵送ス。

正午外出。修養舎ニ赴ク。寄宿者五十人。飯田巽、陸、赤石、~~其他来~~＝工藤則勝等アリ。一寸ト挨拶ス。陸モ西洋田舎土産。工藤氏挨拶。

四時頃帰宅。

兵士鴻臺砲兵十時頃来ル。土方ニ挨拶ス。

3月21日（月）

午前好晴。釣ヲ試ミ鱒数尾ヲ得。

午後、常磐井堯熙君来リ。晩食ヲ共ニス。

独逸公使ヨリ書状アリ。Ostasiatische Gesellschaft〔ドイツ東洋文化研究協会〕ニ紹介シ度由申来ル。

3月22日（火）

好晴。午前平野昌章氏来リ。近衛家ノ事ニ付話アリ。

午後、常磐井堯熙君ヲ訪フ。君今夜出発ノ筈。

午後五時過、早稻田連来ル。但、池田〔龍一〕ハ未ダ上京セズ。金子〔馬治〕⁽⁹²⁾ハ学校準備アリテ来ラズ。来ル者、坂本〔三郎〕、塩沢〔昌貞〕⁽⁹³⁾の両氏ノミ。面白ク話シテ十時過帰ル。

大橋鎌之助ノ失態！

3月23日（水）

終日在宅。別ニ記スル事ナシ。

3月24日（木）

午前晴、午後雨。午前、三浦元衛（茶人）来訪。其レヨリ佐藤清江又々⁽⁹⁴⁾Heirat〔結婚〕ノ厳談。午後、外崎覚⁽⁹⁵⁾来訪。

午後六時日本倶楽部会食。来会者七十余名盛会ナリキ。後藤新平⁽⁹⁶⁾及加藤増雄氏⁽⁹⁷⁾ノ談話後、玉突アリ。十二時頃至。一時頃帰寓。

3月25日（金）

資 料

好晴。暖。終日在宅。Herzzerreissende Briefe〔心を引き裂く手紙たち〕

“frei” und “glücklich”〔「自由」で「幸せ」！〕

部屋ニ Carpet ヲ布ク。

徳川公爵ヨリ明日ノ傍聴券ヲ送付セラレ菊地⁽⁹⁸⁾九郎ヨリハ廿七、廿八、廿九、三ヶ日ノ傍聴券送ラル。

3月26日（土）

晴。Etwas ruhigene Briefe〔少し落ち着いた手紙たち〕。午前貴族院傍聴。

外務大臣〔(小村壽太郎)〕日露外交始末ノ演舌あり行ク（檜磨君同行）。

十一時十五分閉場後、日比谷公園ヲ散歩シ〔華族〕会館ニ至リ徳川家達、〔徳川〕達孝、〔徳川〕頼倫等⁽⁹⁹⁾ノ諸氏ト会食後、伊達〔宗定〕子爵⁽¹⁰⁰⁾ト玉ヲ突ク。

四時ヨリ千駄ヶ谷ニ至リ〔徳川〕家正君⁽¹⁰¹⁾ノ成年祝アリ。食事西洋風。

十時頃帰宅。

3月27日（日）

雨。午後、山崎直方⁽¹⁰²⁾、高木貞治⁽¹⁰³⁾ノ二氏来訪。

晩七時、宇都宮氏ノ招待ニテ三田ノ同氏ノ宅ニ行ク。

席ニアルモノ柳沢、入沢〔達吉〕⁽¹⁰⁴⁾、松山〔陽太郎〕⁽¹⁰⁵⁾ノ三氏及主人。

夜一時頃帰邸。

3月28日（月）

雨。早朝発起。独逸行書状ヲ認ム。

来訪者建部⁽¹⁰⁶⁾遯吾⁽¹⁰⁷⁾及寺田⁽¹⁰⁸⁾純司。

午後外出。銀座ニテ買物後目白近衛家ニ行ク。

晩食後十二時半頃帰宅。

留守中、手島知徳⁽¹⁰⁹⁾、土曜会ノ近衛祭（三十一日）ニ就テ来ル。

3月29日（水）

好晴。正午十二時頃外出。衆議院ノ傍聴ニ行ク。露探事件ニテ一寸と騒しかりし後、銀座辺買物。

留守中柳沢伯紹介ニテ第一生命相互会社の石川善太郎氏⁽¹¹⁰⁾及甲野斐氏⁽¹¹¹⁾来る。

父は寛子と河崎の大師御開帳ニ赴ク。⁽¹¹¹⁾

3月30日（水）

曇。午前服部時計屋物品持参。

柳沢伯の紹介ニテ洋服屋深谷徳四郎来ル。

長岡子ヨリ面会ノ電話来ル。都合出来ズシテ断ル。

女子語学校ノ慈善会（戦争ニ就）アリ。コンドル〔(Josiah Conder)〕⁽¹¹¹⁾ 氏ノ妻⁽¹¹²⁾〔(くめ)〕モアリシ。

其前築地精養軒ニテ食事。聳キタリ。四時山崎屋ニテ仮仕立縫ノ後横浜 Ostasiatische Gesellschaft ニテ Vortrag über Formose〔台湾に関する講義〕アリ。

Hotel Oriental ニテ晚餐。独乙公使。Major〔Artur Sigismund von〕⁽¹¹³⁾ Förster〔フェルスター少佐〕, Baely,〔Rudolph〕⁽¹¹⁴⁾ Lehmann.

3月31日（木）

早朝九時^{池田}宇都宮来ル。

土曜会々員 星ヶ丘ニテ近衛ノ追悼会アリ。

食後日本倶楽部。日本倶楽部ニテ長岡子ト会合。結婚ノ談 lächerlich〔愚かしい〕。

日比谷公園散歩後会館ニ行ク。華族会館伯爵会来会者三十七八名盛ナリ。⁽¹¹⁵⁾ 寺島〔誠一郎〕伯昨夜帰国セリとて列席。

父上ノ玉突近来ノ奇談（長岡子爵ノ評）。

4月1日（金）

晴夜雨。宇都宮池田龍一ト日本倶楽部ニ会食。

長岡氏ト一寸ト会談。見合スルコトナル。

池田⁽¹¹⁶⁾氏ト佐田氏結婚ノ話アリ（伊達男爵娘）。

玉突ヲナシ七時頃 Club ニ於テ晩食ノ後伊達男ノ顔ヲ見ル者会館居ラズ。

~~散歩銀座＝帰寓＝~~雨始マル。帝国ホテルノパールニテ一杯飲ミ銀座通散歩シテ帰寓。

留守中服部時計屋勘定受取ニ来ル。

資 料

4月2日（土）

晴。午前木村元雄氏⁽¹¹⁷⁾横浜ヨリ来訪。

午後食事後齊藤来り財政ノ談話。

五時外出柳沢伯ヲ訪ヒ、晚餐松山陽太郎アリ。外、宇都宮来ル。音楽玉突。一時頃帰寓。

4月3日（日）

⁽¹¹⁸⁾
〔マ マ〕
Osternsonntag〔復活祭〕。曇半晴。

早朝工藤謙氏⁽¹¹⁸⁾来訪（工学士鉄道局）。

次テ北村糺氏⁽¹¹⁹⁾来訪。

午後釣ヲ試ミ鮎八尾ヲ得。

夕七時ヨリ宇都宮招待ニテ（シンキラク）⁽¹²⁰⁾ニ飲ム。座ニ新潟県代議士濱尾（？）氏アリ。

電報 Ostergruss〔復活祭の挨拶〕ヲ送ル。

今朝書斎ニ硝子戸ヲ設ク。

4月4日（月）

Ostermontag〔復活祭月曜日〕。曇後雨。明治病院へ行キ額ノ糸ヲ抜ク（寺田）。

後上野精養軒ニテ昼食。

雨ノ為帰邸（相撲見物ノ筈ナリシモ）⁽¹²⁰⁾。

午後六時頃、銀座山崎洋服店ニ行キ夫レヨリ鏡一ケ購求後、珍田氏ヲ訪フ。りき子、のり子、たつのお供ニテ先ニアリ。晚餐ノ御馳走ニナリ十一時帰邸。

4月5日（火）

雨。全日在宅。齊藤ヲ招キテ終日財政ノ談話ヲ聞キ夕食ヲ共ニシ十一時頃帰ル。故篤麿君御遺物来ル。

4月6日（水）

晴。大風。母上⁽¹²¹⁾〔（津軽尹子）〕ノ命日ニテ父上初メ上野へ参詣。

予ハ留守番。陸来り談話。久保無二雄⁽¹²²⁾（別子銅山 Direktor）ト約束ありテ五時頃東京倶楽部ニ至リ杉⁽¹²³⁾〔梅三郎〕ニモ会フ。

シンキラクニテ柳沢、倉知⁽¹²⁴⁾〔鉄吉〕、田川銀之助⁽¹²⁵⁾、田中鎌吉⁽¹²⁶⁾等ト飲ム。
倉知ノ話ニ独乙公使、予ニ勲章ヲ授クル意アリト。

4月7日（木）

好晴。手紙独逸へ出ス。

午前十一時頃菊地⁽¹²⁷⁾九郎氏来訪。

りき子君目白へ行ク。

北里柴三郎⁽¹²⁷⁾来訪。

御茶ノ先生蓮原新次郎来り雅ノ菓子入持参。

此夕会館ニ小笠原〔長生〕子爵⁽¹²⁸⁾ノ海軍戦争談アリ。来会者多シ。予ハ之ヲ聞キ
柳沢ト歩シテ東京倶楽部ニ至リ杵、久保等ト会シ夫レヨリ柳沢ノ馬車ニテ同気
倶楽部ニ至リ恤兵音楽会ヲ開ク。義太夫三曲、手踊、大護摩等アリ後、間モナ
ク帰ル。

4月8日（金）

好晴。暖。此日午前午後二時頃外出。早稲田大学ヲ見ル。途中ニテ池田ニ会ス。
池田ト歩シテ同大学へ至リ高田早苗⁽¹²⁹⁾ニ面会。同氏ノ案内ニテ各教室及書籍館見
物後、高田、池田ノ両氏ト大隈〔重信〕伯⁽¹³⁰⁾ヲ訪フ。談話三十分計。夫レヨリ兩
氏ト分レ大隈信常⁽¹³¹⁾ヲ一寸ト訪問。夫レヨリ目白ニ至レハ午後五時頃種々家政ニ
就キ談話。夕刻文麿鎌倉ヨリ帰ル。

十時頃帰邸。

4月9日（土）

晴。朝、成田与作⁽¹³²⁾、修交会ノ幹事来ル。歓迎会ノ相談。

飯田巽来り、婚姻ノ談及津軽維新来ノ歴史編纂ニ就キ談アリ。

午後、千坂ノ目白ヨリ一寸ト帰り来ルヲ待ツ。土産物準備ノタメナリ。午後六
時、日本倶楽部ノ伊藤〔博文〕⁽¹³³⁾侯歓迎会ニ赴ケル時来ル後ニ託シテ帰~~ル~~外出。
伊藤^{〔ママ〕}藤歓迎会盛会。来会者八十余人。岡部職長^{〔長職〕}⁽¹³⁴⁾へベレケ演舌。予ハ早く帰ル。
明日早キ故ナリ。

千坂ハ此晩邸ニ泊シ明日又日暮里ヨリ目白ニ行ク。十七日春季祭ノ終ルマデ目
白ニ滞泊ノ筈。

資 料

4月10日（日）

好晴。近衛百日祭ニ付一同日暮里墓所ニ参詣。予ト檐磨君トハ少シク後ヨリ行ク。至レバ祭祀既ニ始マリ居レリ。来会者近親ノ外、徳川公爵、一条公爵ノ息子〔（実孝カ）〕、鷹司〔熙通〕公爵、島津〔忠重〕公爵、二条公爵、廣橋（賢光）⁽¹⁴¹⁾侯爵、前田御隠居等アリキ。夫レヨリ目白邸ニ赴キ又祭礼。其後食事。文磨来客ニ汽車（予ノ与ヘシモノ）ヲ見セテ来客帰ル。予ハ後ニ残り貞子、文磨、対馬嘉三郎⁽¹³⁵⁾及平野〔長憲〕⁽¹³⁶⁾ト近傍学習院敷地辺ヲ散歩ス。帰りテ晚餐トナル。対馬、平野陪食。対馬、予ヲ以テ近衛ノおばけトナス。
対馬此時此日貞子ト商議員撰定ヲ決ス。

独乙便アリ。

4月11日（月）

晴。午前在宅。

佐藤弥六⁽¹³⁷⁾及船水武五郎氏⁽¹³⁸⁾来訪。

午後三時頃、珍田夫人〔（岩）〕⁽¹³⁹⁾、令嬢〔（さだ）〕⁽¹⁴⁰⁾と来ル。予ハ午後久保ヲ案内セシ為東京倶楽部ニ行ク。久保、柳沢既ニアラス。

歩行シテシンキラクニ赴キ、彼等ト飲ミ十一時頃帰。

今日昼頃土産物ヲ執フ右〔下〕ノ如シ。

父上

宝石入置時計、銀製巻烟草入、伯林製花瓶、反物

りき子

金トプラチン時計鑽、真珠襟止、はさみ四ツ入、銀製品、紙切はさみ
檐磨君

旅行用置時計、シルレル全集、本綴器械、銀製烟草入、紙切はさみ
のり子

金時計鑽、指環、襟留、はさみ三ツ入、御端書帖、人形二ツ

4月12日（火）

晴。今朝野崎武吉郎⁽¹⁴¹⁾、田辺為三郎⁽¹⁴²⁾ノ両氏来訪。

午後、斉藤ト西洋家具見物ノ為外出。南明館ニテ日置ノ出品ヲ見、夫レヨリ小

林義雄方ニテ西洋家具見積書調製ヲ命ズ。
夫レヨリ日本倶楽部ニテ晚餐。檐麿君モ来ル。
十時頃帰邸。

4月13日（水）

曇後晴。父上ト小金井ノ桜ヲ見ル。九時二十分ノ筈ナリシモ遅刻。十時十分ノ
臨時ニテ発車。十二時半頃境着。歩行ニテ小金井ニ至リ食事。夫レヨリ車ニテ
国分寺、汽車二時五十九分帰ル。新宿ニ於テ汽車日比谷迄。夫レヨリ日本倶楽
部ニテ紅茶。銀座ヲ歩シテ京橋ヨリ人車。帰邸六時半頃。
食後唱歌。Selig sind die Verfolgung leiden〔迫害を被る者は幸いかな〕
Sehnsucht!〔憧れる！〕

4月14日（木）

雨。北村糺来リ、近衛家家政ニ就キ談話。商議人撰定ハ不賛成ノ様子。奥向ノ
事ニハ賛成。尤モ千坂ト相談ノ筈。
十二時頃文麿君来ル。
一時頃大隈信常氏来訪。
小林見本ト見積書持参。
旅順第七回攻撃〔Stepan Osipovich〕⁽¹⁴⁾ Makaroff 戦死ノ快報。号外アリ。快絶。
文麿君、六時頃帰宅。
齊藤ハ対馬来リタル為メ来ラズ。
終日在宅。

4月15日（金）

曇。今朝かね及中西某（女中）来ル。
石山某（機械屋）来ル。
午後寝三時ヨリ六時半迄。
独乙ヘ手紙ヲ認ムル積ナリシモ終ニ書カズ。困ツタ。
給事ヲ雇フ。亀戸村小学校校長ノ長子ナリ。高等小学校ヲ卒業シ当年十五歳ナ
リ。

資 料

4月16日（土）

雨。今日夕星ヶ丘茶寮ニ於テ津軽人ノ歡迎会アリ（修交会）。会スル者三十人計。午後九時頃迄ニテ帰邸。

4月17日（日）

晴。午前九時半外出。近衛家春季祭ニ赴ク。光蘭様モ席ニアリ。十一時頃祭礼終リテ昼食。

貞子様ニ北村糺ト話ノ結果報告セリ。

午後津軽人運動会へ赴ク（汽車ニテ）。文麿君同伴。飛鳥山ニテ撃剣相撲其他ノ運動ヲ見五時半頃帰邸。

途中檜麿君ト浅草へ廻リ芳梅亭ニテ餐食。

晚餐後帰邸。

此日本箱出来。

4月18日（月）

晴。午後八時、りき子、のり子と外出。東京女学館ニ於テ愛国婦人会催ノ芝居見物。中々ヨカリシ。

午後十一時頃帰邸。

4月19日（火）

雨。此日書籍ノ片付ヲナシ午後ニ至リ同気倶楽部へ至リ、柳沢トシンキラクニ飲ム。

4月20日（水）

雨。全日部屋ノ取片付ニ尽力。

父上ヨリ三十六年度予算調書受取り財政整理ノ依頼ヲ受ク。

夕刻食堂間ニ父上モ来リ会食。西洋部屋ノ利益大ナリ。

小田桐孫女、此般東京高等師範学校ノモノ大分県へ雇ハレ明日出発ニ付暇乞ニ来ル。

4月21日（木）

晴。全日予算取調ニ取掛ル。

夕刻千坂目白ヨリ帰り例ノ金額九百八十三円余持帰ル。

工藤行幹吐血死亡ノ電話アリ。驚クベシ。

千坂、貞子様ヨリ手紙持参。千坂ノ計画ニ付キ困難ノ通信。

今日、日本倶楽部へ行ノ筈ナリシモイヤニナリテ断ハル。

4月22日（金）

晴。在宅。財政取調ニ従事ス。

4月23日（土）

晴。父上ト二時一分ノ汽車ニテ本所停車場ヨリ曳舟ニ至リ（三等ノミ）、百花園ヲ見テ向島ヲ歩シ雷門ヨリ電車京橋迄。夫ヨリ又々歩行華族会館。檜麿君、木下、牧野トテニスヲナシ食事中。予ハ父上ト食事後、徳川厚君等ト玉突。⁽¹⁶⁾
又々歩行。京橋ヨリ人車。帰邸十時半。

4月24日（日）

晴。風。^{午前}終日在宅。⁽¹⁶⁾午後那須次郎君来ル。談話中小林ノ使来リ、家具図面受取り帰ル。食卓ノ事モ談話セリ。

午後、柳沢ヨリ電話アリ。^三四時半迄ニテ小林ニテ会スル約束ナリシモ後レ四時半頃トナル。予ハ荒木額縁屋ニ至リ近衛写真ノ額縁注文。

柳沢此処ニ来リ同氏馬車ニテ中洲真砂座~~ヲ見ル~~劇（此輟兵）ヲ見ル Teater, Cirum Varieti 等ノアイノコ。然シー一寸ト面白カリシ。

帰途鳩屋ニテ食事。十二時半頃帰邸。

4月25日（月）

晴。風強シ。午前十時半外出。穂積博士訪問。氏と博士問題ニテ談話アリ。廿七日法理学会ニ案内セラル。夫レヨリ松波〔仁一郎〕⁽¹⁶⁾氏ヲ訪ヒ不在。夫レヨリ大村〔仁太郎〕⁽¹⁸⁾氏在宅。夫レヨリ池田氏在宅。昼食ノ御馳走ニナル。

青木及塩沢氏来ル。四時頃辞シテ銀座ニ行キ小林方ニテ談話。夫レヨリ丸善買物。

帰邸六時頃。

資 料

4月26日（火）

晴。全日在宅。小林義雄技師同伴来邸。談話ノ後帰ル。

桜田倶楽部入会の書ヲ送る。

4月27日（水）

晴。此日 Arco-Valley 伯ノ招待ヲ受ケシモ辞シテ法理研究会ニ赴キ（穂積博士ノ客として）晚餐後、岡田〔朝太郎〕博士⁽¹⁴⁾ノ催眠術と刑法トノ関係ト題スル講演アリ。其後、討論盛ナリ。会スルモ四十人計。

今日米国看病婦〔Anita Newcomb〕McGee 氏⁽¹⁵⁾ノ招待会、後楽園ニアリ。りき子、のり子行ク。

4月28日（木）

好晴。全日在宅。邸内ヲ散歩シ玄関ノ不潔ニ驚ク。

珍田氏ヨリ来翰。明日同氏檜磨君ト同伴シテ三宮男爵ヲ訪ヒ、檜磨君、式部職出仕の事関シテ依頼スル積。

齊藤達郎未ダ出勤セズ。

4月29日（金）

晴。独乙便来ル。送金ノ為横浜へ行ク。十二時三十分ノ臨時列車ニテ神奈川迄行キ、夫レヨリ人車ニテ横浜 Hotel Oriental ニ於テ汽車ノ時間問合せ。Hong-Kong Shanghai Banking Corporation ニテ500mk=243,30ト電報料27,56ヲ支払。夫レヨリ電信局ニ於テ17,90ニテ電報シ „Patience lettres“。停車場ニ至レハ二時四十五分ノ汽車ハ既ニ発シタル後ナレバ四時四十分迄待。上階ノ Restaurant ニテ食事。五時四十五分帰京。直チニ人車帰宅。直チニ衣替。会館ニ赴ク。会館ニ於テ大韓^(公)国大使〔(趙民熙カ)〕ノ饗応。会スルモノ五十人計。余興トシテゲン燈アリ。十二時頃帰宅。

4月30日（土）

晴時々雨。額（日夜）修復成リ、篤磨君ノ写真ノ額出来。

昨日自転車修繕出来タルタメ試乗ノ為メ亀井戸天神迄行ク。

今日稲荷ノ祭アリ。野蛮ノ余風嗚呼。

今日夜独乙公使ノ宴会アリテ出席。来会者田中平八、田中銀之助、田中鎌吉、伊藤勇吉⁽¹⁵²⁾、池田〔正介カ〕⁽¹⁵³⁾〔陸軍歩兵〕大佐、珍田夫妻、其他独乙人数多。

5月1日（日）

雨。今日池田氏ト大久保ノツ、ジラ見ル約束ナリシモ雨ニテ延引。全日在宅。

九連城大勝利戦報来ル。

独乙便来ル Kor. 12, 13, 14。

5月2日（月）

雨。風。今日後藤六弥ト会合ノ筈ナリシカ雨天ニテ延引。

全日在宅。

5月3日（火）

晴。午後桜田倶楽部ノ歓迎会アリ。晚餐後談話。九時頃帰邸。

5月4日（水）

~~晴。全日在宅。独乙大学ノ歴史ニ付調べ物アリ。午後桜田倶楽部ノ集会所ニ行
ク。晚餐談話。九時頃帰邸。~~

晴。北村糺来り近衛家家産目録及予算案持参。十一時頃帰ル。

午後二時頃対馬嘉三郎来邸。近衛家々政ニ就キ談話アリ。四時半頃帰ル。

夫レヨリ仕度。岡部氏ノ招待ニヨリ日本倶楽部ニテ晚餐。細川侯、長岡子、珍田次官等席ニアリ。

十時帰宅。

独乙便 Kor15 アリ。

5月6日（金）

晴。日本倶楽部ノ晚餐。柳沢、伊達、柳原〔義光〕⁽¹⁵⁵⁾、寺島等。

5月7日（土）

糠覈ノ宴

資 料

5月8日（日）

晴。日本倶楽部ニテ一人昼食。夫レヨリ独逸公使ニ礼ノ訪問。夫ヨリ目白ニ於テ商議員ノ談。

十一時頃帰邸。

今朝立石氏来訪。

提チン行列死傷者ヲ出セル失態。

5月9日（月）

好晴。終日釣。午前釣。釣十五六匹ヲ得。

午後齊藤ト家政寺社保護ノ事ヲ談ズ。

午後六時出邸。本郷座ニ於テ川上〔音二郎〕⁽¹⁵⁶⁾ノ戦況報告演劇ヲ見ル。甚拙。同行者柳沢、寺島、柳原ノ三伯、伊達武次郎⁽¹⁵⁷⁾及永松。

5月10日（火）

好晴。微風。北村糺来リ、商議員ノ話アリ。

午後二時四十五分ノ汽車ニテ横浜ニ行キ種々買物。独乙ヘ送ル Constanse, Rosenberg, Rein 等。

5月11日（水）

好晴。独乙ヘ郵便。今朝齊藤璉ト家政ノ相談あり。又檜磨君ノ事ニ就キ相談スル処アリ。式部官ハ寧口止タル方ヨロシカラシカ。

午後二時半、平野、対馬ノ両氏来訪。商議員ノ事ヲ語り知ラセ両氏満足シテ去ル。

午後四時外出。小林ヲ訪ヒ本棚及額台注文。

夫レヨリ会館ノ伯爵会ニ赴ク。松方伯ノ戦時經濟ニ関スル演舌ニハ既ニ遅カリシ。後晩食玉突。

十時半帰邸。

金五百円丈渡シ特有財産ヘ加入スルヲトナル。

5月12日（木）

強風。暖気。朝ヨリ午後ニ掛ケ蔵入道具類取調。茶器、手アプリ、文庫、化粧具等出ヅ。

今日日本⁽¹⁵⁹⁾供 Japan Society ノ会へ行ク筈ナリシガ呉大五郎氏⁽¹⁵⁹⁾へ電話ニテコトワル。

5月13日（金）

終日在宅。午前十時ニハ田中⁽¹⁶⁰⁾坤六来リ。午後ニハ富田⁽¹⁶¹⁾鉄之助氏来ル。近衛家商議員ヲ~~打合~~ノヲ依頼ス。旧主人ト相談ノ上返答ストテ帰ル。

（富田鉄之助君は仙台藩の旧臣）

5月14日（土）

正午同気俱樂部ニ於テ恤兵絵画会アリ。行キ暫ク見物。夫レヨリ貴族院議長官舎ニテ貞子様徳川家達夫妻ト会食。議事室ニテ近衛ノ油画ヲ見ル（千坂同伴）。後、官舎ニテ夜食（徳川侯爵ハナシ）。後分ル。貞子様及姉ヨリ結婚ノ強談。実ニ断レリ。〔朱線〕

5月15日（日）

終日道具取調ニ従事ス。

5月16日（月）

会館ニ於テ有馬中佐ノ海戦実地談ヲ聴ク。

（午後四時）

5月17日（火）

晴。横浜競馬第二日見物ノ為、りき子、のり子、檜麿君ノ三名ト十時三十分ノ汽車ニテ横浜へ行ク。競馬九番ヲ見ル。実ニ日本婦人ノ役ニ立タヌ事ヲ感セリ。

5月18日（水）

晴時々雨。今夜東方協会ノ総会華族会館ニ於テ開カル。伊藤、栗野⁽¹⁶²⁾〔慎一郎〕、大隈等ノ来客アリ。伊藤、大隈ノ演説面白カリシ。栗野ハ沈黙セリ。

5月19日（木）

資 料

午後六時ヨリ日本倶楽部ノ栗野歓迎会ニ赴ク。

5月20日（金）

晴。午後五時ヨリ高田早苗、大隈信常、田中唯一郎等早稲田連ニ招カレ紅葉館ニ飲ム。大酩酊。帰宅。

5月21日（土）

雨。午後二時半ヨリ上野音楽学校ニ於テ恤兵音楽会アリ。其前穴谷深蔵、新刊^{〔夾戸〕}独逸新聞持参。Konzert ハ未熟。Miss Kayser ノ唱歌ノ外聞ニ足ルモノナシ。能楽モアリシ。嗚呼橋弁慶比較的ヨロシ。

5月24日（火）

目白へ行ク。家政相談ノ為ナリ。

5月26日（木）

午後五時ヨリ法理研究会アリ。催眠術ト民法ノ関係ナリ。志田鉦太郎氏^{〔164〕}ノ講話アリ。之ニ就討論十一時ニ及ブ。今日ニテ医者連ト連合ノ会ハ止ム。

5月27日（金）

美術会ノ展覧会ヲ見ル。坪井トカ申ス人委シク案内ス。夫レヨリ精養軒ニテ食事後動物園（驚タ）及種々展覧会見物。比較的面白カリシ。夫レヨリ帰邸。^{〔165〕}此朝栗田〔富太郎〕大機関士来訪。旅順口第二回閉塞ノ際負傷セルモ今ヤ全治シテ横須賀ノ機関学校ノ教官トナレリ。

5月28日（土）

午前晴、午後微雨。全日釣のお供。砂村、余ハ二才のイナニ匹ヲ得。午後ハ獲物皆無。イナノ総数八匹ナリ。

5月29日（日）

晴。午前一寸ト明日ノ宴会ニ付会館へ行き昼食。
午後三時頃、貞子様、文麿来リタ帰ル。

5月30日（月）

今日、晩餐会ヲ開ク為、午前ヨリ会館へ行キ準備。

午前、柳沢来リシモ又行ク。三時、池田来リ手ツダヒ。

六時前ヨリ来客続々来ル。今日ノ来客ハ徳川家達、細川護成、徳川達孝、柳沢保恵、寺島誠一郎（電話ニテ断リ）、岡部長職、長岡護美、津軽類橘（無断不参）、大隈信常（風邪断）、樺山愛輔、Grant Arco Valley, [Friedrich Carl] von Erckert, [Fritz August] Thiel, Grant [Alfred] Wolff-Metternich, Dr. [Karl] Vogt, [Artur Sigismund] von Förster, 珍田捨巳、石渡敏一、佐藤愛麿、宮岡常次郎、後藤六弥、穂積陳重、高田早苗、中村進牛、松波仁一郎、山田三朗、志田鉦太郎、岡田朝太郎、北里柴三郎、金杉英五郎、三輪信太郎、入沢達吉、田中正平、鳥居春洋、寺田鉄蔵、白鳥実、山口弘一、清水澄、建部遜吾、大村仁太郎、杉梅三郎、北里闌、巖谷季雄〔(小波)〕、湯川寛吉、盧百寿、宇都宮鼎、杉山陽太郎、坂本三郎、塩沢留貞、金子馬二、波多野精一、池田龍一、田中唯一郎、斉藤鉄太郎。

5月31日（火）

今日午後五時、日本倶楽部ニテ後藤、池田ト会合ノ約束。柳沢アリ。電話ニヨリ四時頃行キ、池田、後藤来リテ歓迎会ノ相談アリ。池田、柳沢ト同気倶楽部ニ至リ。食事後玉ヲ突ク。

6月1日（水）

晴。今日、〔華族〕会館ノ記念日。十一時ヨリ式アリ。e.h〔敬意を表して〕尊顔ヲ拝シ、梨本〔宮守正王〕殿下ノ令旨朗読アリ。夫レヨリ日本食立食アリ。閉口。夫レヨリ父上ノお供ニテ橋麿ト芝ノ勤工場ヲ見ル。夫レヨリ分レ、余ハ山崎洋服店及鞆屋靴店及丸善書舗ヲ訪フテ帰ル。

6月2日（木）

晴。午前十一時、柳沢伯来リ昼食ス。夫レヨリ同伯ノ馬車ニテ明治座ニ行キ、敵国降伏（元寇ノ芝居）ヲ見ル。〔初代市川〕左団次二幕丈ケ出タリ。同優近来胃ガンヲ病ム。今回ガお始末ナラントノヲ、氣ノ毒ナリ。終リニ所作事能野アリ。Schön〔美しい〕。夫レヨリ帰ル。

資 料

6月3日（金）

晴。日本服ニテ午後ヨリ相撲ヲ見ル。入五百人計。気ノ毒ナリ。千歳川〔政吉〕、小錦〔八十吉〕等来ル。相撲モ見レバ面白カラザルニ非ズ。齊藤供。^{〔年〕(188)}

6月4日（土）

晴。暑。午前道具類ヲ見、ギヤマン類ヲ出ス。

午後五時紅葉館ノ歓迎会ニ行ク。集マルモノ五十人。田中博士、穂積博士ノ演説アリ。^{〔ママ〕} 満談及紅葉踊ノ余興。

午後十時半頃帰ル。

6月5日（日）

晴。暑甚シ。22℃。午前十時頃、仁保亀松氏⁽¹⁹⁰⁾京都ヨリ上京セリトテ来訪。穂積博士明後年二十五年祭ニStiftung〔財団〕設立ノ事ヲ話セリ。

十一時頃司法次官石渡敏一氏来訪。

十二時共ニ食事シテ帰ル。

午後二時ヨリ近衛家商議會第一次会アリ。富田〔鉄之助〕、対馬、河原田⁽¹⁹¹⁾〔盛美〕、北村列席。北村其商議會ノ人名ヨリ除カレンヲヲ請フ。理由ハ家憲ニ反スルヲ及家職ノ加ハルハ得策ナラヌト云フヲ等。一同協議ノ上裁可。其代理平野〔長憲〕ヲ撰フ。平野聞カズ。四人ニテ商議。財産負債等一々北村ニ質問。夫レヨリ庭園散歩。

七時食事。十時半頃帰ル。十一時半帰邸。

6月6日（月）

雨。津梁院参詣。日暮里参詣。

裁判所ニテ坂本氏案内。裁判所内見物。盧、巖谷、池田同行。

海軍省ニテ宇都宮ト会談ノ後、坂本ノ案内ニテ同氏ノ邸ニ晚餐ス。

6月7日（火）

晴。手紙独乙へ出ス。

午後二時目白へ商議會ニ赴ク。歳入ノ事ニ就キ議シ、家職ヨリ出セル乙案ニテ一年間越エル事ニ決ス。

午後十一時頃帰邸。

手紙独乙ヨリ着。

6月8日（水）

晴。朝十一時、松波仁一郎博士来訪。庭園散歩。

釣ヲ試ム。

昼食後帰ル。

午後三時、大村仁太郎氏来訪。貴族談あり。

午後五時、樺山愛輔氏来リ。貴族ニ就談アリ。

午後七時、宇都宮氏ト日本倶楽部ニ於テ会合。十一時頃迄玉突。

6月9日（木）

晴。風。商議會ノ為メ目白ニ於テ会合。家職、雇人ノ件。北村ハ辞職、六條⁽¹⁹²⁾〔定光〕ハ辞職ヲ勧告。小川すみ⁽¹⁹³⁾辞職。中臈一人、下女一人減スル事ヲ議シ、其恩給ノ事ヲ議シ、一同捺印ス。余ハ印形失念セル為次回ニ譲ル。

結婚ノ件〔朱線〕ニ就キ貞子様ニ充分ノ決心ヲ示ス。

6月10日（金）

晴。今朝、宇都宮氏、満洲丸ニテ横須賀発スルニ就（内外新聞記者、外国公使館付海軍軍人、貴衆両院等ヲ乗セ）、約束ノ小説類ヲ送ル。

午前十時半頃、陸実氏来ル。談、柳沢伯ト事ニ及ブ。

正午頃ヨリ相撲九日目ノ見物。入十分ノ一計。寂然タリ。一向見栄ナシ。

今日、白人会⁽¹⁹⁴⁾（発句）アルモ出席セズ。

6月11日（土）

晴。午後雨。露ノ始リ嗚呼！

今日、Young Men's Christian Association。

美土代町ニ於テ Madame Kenkler's Pupils ノ音楽会アリ。のり子、りき子兩人共テ見物ノ積。

兩人ヲ先ニ出シ後ヨリ人車ニテ行ク積ノ処、二時半頃、藤波〔言忠〕子爵来訪。

資 料

折角故対面。談話一時間ニ及び大ニ遅刻ニテ四時頃音楽会ニ行ケリ。甚面白カラズ。

其レヨリ会館ニテ燕尾服ニ衣替、独乙公使ノ寓ニ赴ク。徳川侯爵其他数多アリ。午後十一時頃辞シテ去リ ^{〔東京倶楽部〕} Tokyo Clubニテ寺島及田中トカルタヲ遊び、一時頃帰宅。

6月12日（日）

赤石定蔵来訪。

6月13日（月）

河原田来訪。近日帰郷ノ筈。

6月14日（火）

藤波子爵来訪。

孤児音楽会。

6月15日（水）

北里闌氏来訪。署書^{〔著〕}こゝろ持参。

6月16日（木）

晴。今朝浦塩艦体^{〔隊〕}日本海来寇ノ報アリ。常陸丸以下ノ遭難歎ズベシ。三菱銀行ヨリ金子受取人来ル。断リ帰ス。

6月17日（金）

晴。父上、りき子、のり子と堀切ノ葛蒲ヲ見シ。先ヅ吉野園ニ行クトテ汽車ニテ行ク。予ハ人車ニテ吉野園。夫レヨリ歩行堀切。Floreuy 夫妻ニ出会。人車ニテ浅草。島屋ニテ仕度。

6月18日（土）

大風雨。午前会算ニ於テ取調物ヲナシ、午後目白ニ行ク。徳川夫人モアリ、貞子様ト種々家政ノ談アリ。徳川泰子様及貞子様ヨリ婚姻話ニテ大困却。〔朱線〕

6月19日（日）

曇。午前十一時、伊東菊太郎氏来訪。昼食。午後四時帰ル。

6月20日（月）

曇。午前三菱ヨリ問合来ル。

午後齊藤ト談話。夕七時ニ至レル。

独乙ヨリ端書二葉来ル。

6月21日（火）

曇。午前十一時、三菱銀行ヨリ紹介電話来ル。

午前十時半頃、新負債ノ件ニ就キ父上ニ歎願許可。

午後一時頃、今規弘使⁽¹⁹⁵⁾ニテ三菱会社へ行ク。2530.70Yen 持参。

午後二時半、対馬嘉三郎来リ近衛家ノ話。

午後四時釣ヲ試ミ鯉三匹ヲ得。

6月29日（水）

晴。午前〔朱線〕、桑田熊三郎氏来邸。種々政党等ニ就注意セラレタリ。

午後一時、佐藤忠雄来邸、三四年 München ニテ医学研究セル人ナリ。二月頃帰朝。

6月30日（木）

晴、暑。午後家具取調。

午前徳川義恕ノ家扶矢野来邸。一寸ト対面。

7月1日（金）

晴、暑。八十五度位。午前、家政取調物及道具調。

午後、昨日ノ札ニ藤堂〔高紹〕伯爵訪問。⁽¹⁹⁷⁾夫レヨリ榛原ニ於テ紙類購求。手紙ヲ独乙ヘ送ル。

日本倶楽部ニ於テ五十名計集会。〔駐韓〕公使林権助氏ノ歓迎会アリ。早尾、今井氏等ト快談。十一時頃帰邸。

資 料

7月2日（土）

晴、暑。予ノ室八十六度位。早朝郵便82出ス。暑気ニテ不快ノ為メ無沙汰申送ル。午前、家政取調物。

午後、道具ヲ見ル。

対馬嘉三郎来邸。近衛家ニ就キ相談アリ。

午後、清水信重来邸（予ノ呼び出ニヨリ）。以後近衛家家政ニ就キ依頼スル。先老女心得すみヲ暫ク邸内ニ留メ置クハ不得策ナリトノ説。今更其責任トナリタル人ト表奥ノ相談ヲナスヲモ出来サレバ。

7月3日（日）

曇、朝雨。今日、父上ノお供ニテ砂村へ釣ニ行ク積ニテ、父上早朝、余ハ斉藤ニ内外償償却案結了、之ヲ送り出ントスルトキ北村糺来ル。今回辞職聞届ニ付御札ニ出タルナリ。十一時頃行ク。得ル処少ナシ。

7月24日（日）〔7月25日⁽¹⁹⁸⁾〕

大雨。比較的冷。午前十一時、皇后陛下拝謁ニ付参内。香川〔敬三〕氏⁽¹⁹⁹⁾ニ面会。夫レヨリ奥ニテ拝顔。反物及菓子ノ頂戴料飲物アリ。雑魚ヲ献ズ。十二時頃退出。

二時頃、貞子様来訪。廿日以来、武子⁽²⁰⁰⁾、忠麿等病気ニ就キ、文麿ノ滞在中ニ就、挨拶ニ来リシナリ。

又泰子様ノ手紙持参。談婚姻ノ事ニ及ビ予遂ニ進退コ、ニ谷マル。

Abscheulich weibliche Japanerin, derb ungelenkig hässlich, hässlich, ungebildet Pfui Pfui!〔忌々しい日本人女、粗野で不器用で見苦しい、見苦しい、無教養だ、吐き気がする!〕

- （1） 英麿に関する伝記的事実については、特にことわらない限り羽賀与七郎『津軽英麿伝』陸奥史談会（1965年）による。なお英麿の生母は、地下家石川氏の娘千佐（のち千坂に改名）である。
 - （2） 長谷川成一「津軽藩々政文書の基礎的研究（1）：近世前期藩政文書を中心に」文系論叢文学科篇（1）（1980年）102-104頁。
 - （3） 弘前藩第十一代藩主順承は天保14年3月、一門津軽直記順朝の長男武之助（承祐）を養嗣子としたが、承祐は安政2年7月に亡くなった。そこで承祐の弟で、
- 〔阪大法学〕76（2-310）652〔2026.7〕

黒石藩第四代藩主の承叙を養嗣子に迎えようとしたが、承祐と縁組していた順承四女の玉（常）姫との逆縁婚を幕府が「倫義ニ悖ル」と判断したためかなわなかった。そこで、親戚一同の同意のもとで細川家より承昭を迎えることとし、安政3年6月（1856年7月）に幕府より許可を得た（津軽承昭公伝刊行会編（代表：飯田巽）『津軽承昭公伝』、1917年、2-3頁）。

- (4) 華族の家族関係については、特にことわらない限り霞会館華族家系大成編輯委員会（代表：上野秀治）『平成新修旧華族家系大成（上・下）』吉川弘文館（1996年）による。
- (5) 承昭は、敏武丸、昭徳という「二人の男子を儲けたが何れも夭折し（ルビは原文）」た（羽賀・前掲注（1）5-6頁）。
- (6) 篤麿は1890年6月にライプツィヒ大学より学位を受けた。ハンス・ペーター・マルチュケ（阿部津々子訳）「明治期の日本人法律家によるドイツの大学における博士論文—第二部：公法学の分野における事例（1）」法の思想と歴史（2）（2022年）261-263頁は、「僅か48頁で書かれた」篤麿の博士論文（*Die Ministerverantwortlichkeit nach der japanischen Verfassung* 〈「日本の憲法における大臣責任」〉）の評点は「可」であり、「これが博士論文として許容されたことは、どちらかといえば貴族特権によるものだったと総括できるだろう。そして、おそらくは評点で妥協が見いだされたのではなかろうか」と分析している。
- (7) 鶴松は叔父常磐井堯熙男爵の養嗣子（堯猷）となり、その跡を継いだ。
- (8) 鶴松は、学位論文（*Studien zum Sumāgadhāvadāna* 〈「スマーガダー＝アヴァダーナの研究」〉）により1897年にカイザー・ヴィルヘルム大学（Kaiser-Wilhelm-Universität）で学位を得て、明治32（1899）年7月に帰国した（『堯猷上人年譜』高田学報（42）、1958年、50頁、岩本裕『仏教説話研究 第5巻』開明書院、1979年、68-69頁注（1））。ドイツに留学した忠房の三兄弟のうち、本文で記した通り英麿だけが学位取得に至らなかったのである。
- (9) フンボルト大学ベルリンの研究員であったルドルフ・ハルトマン（Rudolf Hartmann）の調査にもとづく、1868年から1914年までにドイツの大学に留学した日本人に関するデータベース（Japans Studierende in Deutschland 1868-1914）（<https://themen.crossasia.org/japans-studierende/>）によると、英麿は、1894年夏学期-冬学期にボン大学に、1895年冬学期から1898年夏学期までと1902年夏学期から1903年夏学期までベルリン大学に学籍登録している（最終閲覧日：2026年5月16日）。以下、特にことわらない限りドイツの大学への留学記録はこのデータベースによる。このデータベースから得た情報については、URL（<https://themen.crossasia.org/japans-studierende/index/show>）は省略して最終閲覧日のみを記す。
- (10) Tsugaru, Fusamaro. *Die Lehre von der japanischen Adoption*, Berlin: Mayer &

資 料

Müller, 1903. S.VIII.

- (11) ベルリンの日本人コミュニティにおいて、英麿は目立つ存在であった。例えば、ベルリン在住日本人と日本に関心を有するドイツ人からなる和独会（のちの独日協会）の会長を務めたりした（『柏林府和独会の忘年会』読売新聞、1897年2月23日朝刊）。
- (12) 津軽照子「夫を偲びて」羽賀・前掲注（1）17頁。
- (13) 英麿は9回延期願を提出し、その期間は約12年に及んだ。津軽家では明治36（1903）年頃より本格的に帰国促進についての話し合いが行われ、近衛家にこれを依頼した。その交渉役を担ったのが、篤麿の信頼も厚かった日本新聞社社長の陸羯南（元津軽藩士の子）であった。
- (14) 明治36年3月には、英麿と結婚できない理喜子の立場を「悲劇」に仕立てたゴシップ記事（『小間使日記 牡丹の巻』3月10、11、13、19、21、24、27、28、31日朝刊）が読売新聞に連載されるなど（明治38年に今古堂書店から採霞女史（中島益吉編）『小間使日記』として刊行）、彼が帰国しないことは津軽家にとって一種の醜聞となっていた。
- (15) 津軽・前掲注（12）20頁。
- (16) 明治5年10月（1872年11月）に愛媛県に生まれた池田は、明治26（1893）年に東京専門学校邦語政治科を卒業後、ドイツに留学した。ベルリン大学には、1900年冬学期から1902年冬学期まで学籍登録し、1903年に博士論文（*Die Hauserbfolge in Japan unter Berücksichtigung der allgemeinen japanischen Kultur- und Rechtentwicklung* 〈「一般的な日本文化および法の発展を考慮した日本における家督相続」〉）を提出して学位を取得した。帰国後、早稲田大学講師となるが、明治40年1月に日清生命保険株式会社専務取締役となり実業界に転じた（早稲田大学人名データベース 〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22%2216%22,%22id%22%22853;1%22&lang=jp〉）（最終閲覧日：2026年5月7日）。
- (17) 妻の照子によれば、英麿は、「法学部を出たといっても、法理そのものの研究よりは法制史などに興味を持って居た」（津軽・前掲注（12）17頁）。
- (18) 韓国統監府への就職は、弘前藩出身の外務次官珍田捨巳が、統監の伊藤博文に推薦したものであるという（羽賀与七郎「津軽英麿」弘前市立弘前図書館編『郷土の先人を語る（4）』弘前市立弘前図書館＝弘前図書館後援会、1969年、61頁）。
- (19) 式部官への異動は、叔父の常磐井堯熙や姉の徳川泰子が、病がちな英麿を心配して頻りに内地に戻ることを求めたことによるという（羽賀・前掲注（1）20頁）。
- (20) 承昭の娘寛子（英麿の妹）の子で、尾張徳川家分家徳川家当主（男爵）義恕の次男。
- (21) 佐藤巖編『廣池博士の学問上における経歴』（広池学園出版部、1988年復刊・阪大法学）76（2-312）654〔2026.7〕

原著1928年）75頁をはじめ、この事業は長く「大宝令のドイツ文翻訳」とされてきたが、利光三津夫の指摘どおり、「現在の令が、養老令であることが明らかとなつた今日においては、かかる用語を使用することは避けるべきであると思う。右翻訳作業は、令本文のみならず義解の文にも及んでいる。従つて、これはむしろ「令義解独訳作業」と称する方が適當である」（「広池博士とその律令学」（初出1973年）同『続律令制とその周辺』慶應義塾大学法学研究会、1973年、213頁）。なお英麿の妻照子によれば、穂積に「条文の翻訳だけでなく、解釈を附けて」と提案したのは英麿であつた（津軽・前掲注（12）18頁）。

- (22) 著者らは大阪大学グローバル日本学教育研究拠点2024年度拠点形成プログラム（「明治期における伝統日本法紹介の試み：日独法学者による『令義解』独訳計画」〈<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/project/2024a/>〉）でこの課題に取り組んでいる。
- (23) デットマーによる養老律令の翻訳は、2009年から2014年にかけて、*Der Yōrō-Kodex* というタイトルで、Harrassowitz から全4冊で刊行された。
- (24) Kohler, Josef. „Studien aus dem japanischen Recht“, *Zeitschrift für vergleichende Rechtswissenschaft*, Bd. X (1892), S. 380 でコーラーは、ゲオルク・ミヒャエリス (Georg Michaelis) やチャールズ・タリング (Charles James Tarring) の業績を挙げて、その翻訳の必要性を訴えている。
- (25) 石部雅亮「穂積陳重と比較法学」法の思想と歴史（4）（2024年・原著2002年）143頁が指摘するように、穂積は「1880年の夏学期と冬学期、ベルリン大学で聴講している」が、コーラーが「ベルリン大学に教授として招聘されるのは、1888年のことであるから、おそらく（中略）交際は生じなかった」。コーラーとの接点は、彼を中心とする国際的な比較法学のネットワークを通じて形成されたと見られる（144-146頁）。ただし、明治32年12月6日から翌年1月19日まで穂積はベルリンに滞在しているので、あるいは、このときにコーラーと面会したかもしれない（井手文子・柴田三千雄編『箕作元八・滞欧「箴梅日記」』東京大学出版会、1984年、71頁（明治32年12月7日条）、89頁（明治33年1月19日条））。
- (26) 穂積は最初、日本法制史の宮崎道三郎に「訳文の原文たるべき日本本文の立案を依頼」したが、「宮崎氏はその事業の困難なることを称してこれを辞」したため、「数年間その候補者を物色せしもこれを得」なかった（佐藤・前掲注（21）75頁）。しかし、明治38年にコーラーからの「日本古代法の研究の爲め大宝令及び大宝律の歐洲語訳本を得度は既に多年拙者の切望する所に有之候此法典を知得せずんば日本法律の發展を充分に理解すること到底不可能の事に属し候得共拙者に於て如何とも致兼ね困却罷在候從來屢々此翻譯を得度努力致候共何人も之に従事する者無之様存候甚だ遺憾の至に不堪候此法典の智識は独り日本法制沿革上有益なるのみならず實に人類開化史上に重要な一時期を成すに至るべき事と愚考

仕候（傍丸は原文）」（「コーラー教授の書翰」法学協会雑誌23（3）、1905年、447頁）との書翰を得て、この作業に取り組むことを決意したという。

(27) 津軽・前掲注（12）18頁。

(28) *Die Lehre von der japanischen Adoption* の序文にはその名は挙げられていないが、羽賀・前掲注（1）148頁は、「英麿はベルリン大学時代にコーラー博士の民法・法哲学などの講義を聴いているため、コーラー博士は彼の恩師でもあった」と指摘する。

(29) 佐藤・前掲注（21）76頁。利光・前掲注（21）221頁は、池田は「明治三十八年末までは津軽氏を補助していた如くであるが、その後実業界に入り、本事業との関係を断つた」と指摘する。

(30) 英麿は *Die Lehre von der japanischen Adoption* の序文（S. VIII）で穂積から資料の提供を受けたことについて、感謝の意を示している。両者は、1900年2月にロンドンで初めて対面した。英麿は、この面会をきっかけに法律学の面白さに目覚めたと篤麿に語っている（「明治35年8月25日付近衛篤麿宛津軽英麿書翰」近衛篤麿日記刊行会（代表：浅野長武）『近衛篤麿日記（第5巻）』鹿島研究所出版会、1969年、184頁）。

(31) 津軽・前掲注（12）18頁。

(32) 同上18頁。

(33) 利光・前掲注（21）218頁。

(34) 同上217-222頁。

(35) 昭和14（1939）年1月に、英麿の伝記執筆のために実業家の船水武五郎がこの事業について尋ねた際に、陳重の子重遠（東京帝国大学法学部教授）は次のように語ったという。「若し『令義解』を独訳にする仕事を始められたとしたら、広池氏は只日本古代の法律に就いての研究をした^{ひと}仁であるから、法文の解釈などに就いて御手伝をさせる為め、父から御紹介して協力することになったのだらうと思はれる。之を独逸語に^ひ翻譯されたのは、多分津軽伯と池田（龍一氏の事）の仕事であつたらしく特に独逸語に於て当時最も堪能であられた津軽伯か専ら之に当られたことは想像に難くない。ところで其遺稿であるが、父が没した跡、自分は存生中の書類一切を整理し、カード式にして書庫に収め、一々索引を付してあるから、御手紙を拝見してから調べて見たが何分出て来ぬ。津軽伯に関する部門、広池氏に関する部門から令に就いての部門まで調べて見たが、御申越に該当する書類は何も^は這入^て居らぬ。或は皆様で各保管の儘になって未だ父の手に渡って居なかったのではないかと思はれる（ルビは原文のまま…著者注）」（羽賀・前掲注（1）140-141頁）。なお同148頁は、英麿の手に残っていた原稿は、「関東大震災のため焼失した」と記す。

(36) 利光・前掲注（21）212頁。

- (37) この事業について、関係者の中で唯一証言を残しているのは池田龍一である。池田は、「穂積老先生の指導の下に、津軽伯廣池千九郎博士及私の三人で令^(ママ)議解を独逸文に翻訳する企てをしたことがある。併し之は事業としても可成大事業であるし、殊に令義解は我国古代の法律であるから、其の一字一句も忽せにすることの出来ないために、三人は互いに多忙な中を、度々会合したり打合せしたり研究したりしたが、之も余義ない事情が出来て、其の完成を告げなかつたのは、今尚ほ遺憾に思つて居る（原文のルビは省略し、誤っている部分に新たにルビを付した…著者注）」（池田龍一「津軽伯回顧二十年」陸奥の友（6）、1919年、23頁）。
- (38) 石部・前掲注（25）144頁。
- (39) 大庭みな子『津田梅子』朝日新聞出版（2019年復刊・原著1990年）。
- (40) 親友の坂本三郎は、「伯は、凡てが全く独逸風に化して居つた。相貌から言語挙動から、思想も勿論然うであつた（ルビは省略…著者注）」と述べる（「友としての人としての津軽伯」陸奥の友（6）、18頁）。ただし、同じ親友の柳澤保恵は、「十数年外国に居る人達の中には西洋人ともつかず、日本人ともつかず、半端物になつて帰る人がよくあるが、（中略）全然日本人の頭で、即ち和魂洋才と云ふ風であつた（ルビは省略…著者注）」と証言している（「憶、親友津軽伯」同10-11頁）。
- (41) 日記は、2月16日から28日まで、3月2日から6日、12日、5月5日、25日、6月22日から28日、7月4日から23（24）日までは何も書かれていない。
- (42) 「篤麿君は政治活動に急がしく在世中も家政を顧るいとまもなかつたのでまづその整理に当らなければならなかつた。また残る子供さん方の教育、文麿君・直麿君に就ては成人されるまで殊更に心をくばつたのであつた」（津軽・前掲注（12）17頁）。
- (43) ただし英麿は、篤麿とは考え方が大きく異なっていた。栗田尚弥「「津軽英麿」兄、近衛篤麿の「同人種同盟論」を批判」（2022年）一般財団法人霞山会ウェブサイト（最終閲覧日：2026年5月16日）は、両者の考えの違いを以下のようにまとめている。「篤麿が欧州の文化や社会に惹きつけられながらも、欧州（欧米）列強の帝国主義的野望とその裏にある白色人種の人種主義（レイシズム）に対抗するために「同人種同盟論」を説き、東亜同文会を組織したのに対し、英麿はいわば〈名誉白人〉として欧米帝国主義国家の仲間入りすることを主張」した。「英麿の眼には、兄の「同人種同盟論」はあまりにも理想主義的に見えたのかもしれない」。日本に対する偏見を問題視し、正しく日本を紹介することは日本だけでなく、日本以外の世界諸国の利益になるという英麿の立場を紹介するものとして、Hack, Annette. „Die deutsch-japanische Gesellschaft Wa-Doku-Kai (1888-1912)“, In: Haasch, Günter (Hrsg.), *Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften von 1888 bis 1996*. Berlin: Edition Colloquium, 1996, S. 41-42 がある。

資 料

- (44) 大和郡山柳澤家当主。ベルリン大学留学（1895年冬学期-1896年冬学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (45) 妻の照子（豊前豊津小笠原家当主（伯爵）長幹の妹）は、「おなじ年頃の伯爵仲間では柳沢さん、私の兄の小笠原、夫と三人が抜きつ抜かれつの誰がーかといふ肥満型であった。そして皆さんなかなかの大食家であっ」たと述べる（津軽・前掲注（12）22頁）。
- (46) 前掲注（30）「明治35年8月25日付近衛篤磨宛津軽英麿書翰」186頁。英麿は周囲に、「自分は将来貴族院議員と成り政界に入る機は、自ら出来るであろうが、自分の性格から考えると、元来読書好であるから、教授が適任かも知れぬ（ルビは省略…著者注）」と語っていた（岩川友太郎「故津軽伯爵閣下を想うて奨学会の事に及ぶ」陸奥の友（6）、31頁）。
- (47) 津軽・前掲注（12）17頁。
- (48) また英麿は、池田龍一、坂本三郎（行政裁判所評定官・早稲田大学教授）とともに、著名な民法学者であるベルリン大学教授ハインリヒ・デルンブルヒ（Heinrich Dernburg）の著作の翻訳を行い、明治44（1911）年に早稲田大学出版部より『デルンブルヒ独逸新民法論（上・下）』を公刊している。妻の照子は、亡くなるまで「書庫に第二の論文、貴族論を書くために在独中集めた文献、またすでに書くべき条立てを作ってあるアートなどのうづ高くまとめてあ」ったと述べている（津軽・前掲注（12）22頁）。
- (49) 中村隆英「飯田巽「巽経歴譚」」比較文化研究（14）（1974年）106頁。
- (50) 黒石出身の劇作家である秋田雨雀は、「子供の頃」に「郷土の一部の人々が、伯爵の態度や、人生観、社会観と云った様なものが非常に自由過ぎると云ふので、多少攻撃的な態度をとつて居ると云ふ話（ルビは省略…著者）」を耳にしていたという（秋田雨雀「郷土芸術の愛護者としての津軽伯爵」陸奥の友（6）、68頁）。秋田は明治16（1883）年生まれなので、英麿の留学中か帰国直後の噂話であろう。元津軽藩士の子で衆議員議員を務めた菊池武徳は、英麿は「平民的なことを諒解して成るべく君臣的の虚礼を避けて居た（ルビは省略…著者注）」「平民的貴族の典型（ルビは省略…著者注）」であったと述べる（「平民的な伯爵」同35頁）。
- (51) 羽賀・前掲注（1）23頁。
- (52) 結局英麿は、理喜子とは結婚しなかった。明治37年9月30日、分家していた弟の檜麿（男爵。英麿が養嗣子となった翌年の明治11（1878）年7月に生まれた）が亡くなった。承昭の従弟である肥後宇土細川家当主（子爵）行真の子である行雅が跡を継ぐことになり、理喜子は彼と結婚することになったからである。そして英麿は、親友である小笠原長幹伯爵の妹である照子と明治39（1906）年1月に結婚した。
- (53) ただし、英麿は決して「家」を否定していたわけではない。津軽家では明治38
- （阪大法学）76（2-316）658〔2026.7〕

年8月に家範を定めたが、その起草過程において英麿は、世襲財産と特有財産を区別し、後者を遺言によって分割することができるとの規定（15条）を含む原案を「家に不利なる家範」と批判し、元青森市長の笹森儀助（元津軽藩士）を通じて、同条については「家産は総て家督と共に後継者之を継承す」と修正するように求めた。なお、理喜子との結婚が中止となった直後に書かれた、このことを依頼する笹森への書翰の中では、「私を惡むの結果如斯家の觀念にも反し、他家の家範にも嘗て見ざる規定を設くるものと^{ママ}わば遺憾千万に御座候。若私を惡むならば家範を作る前に何とか財産之所分をなしたる方可と存じ候（ルビは原文）」と激しい内容が書かれている（「明治38年2月26日付 津軽英麿書簡」笹森儀助書簡編集委員会編『笹森儀助書簡集』東奥日報社、2008年、320-321頁）。

- (54) 近年の業績としては、梶原克彦＝奈良岡聰智「前田利為日記（一九一三年～一九一四年）（1）」愛媛大学法文学部論集・社会科学篇（48）（2020年）、高木翔太「大名華族山内豊範の日記」高知県立高知城歴史博物館研究紀要（4）（2021年）、同「大名華族山内豊範の日記 明治五年分」同（5）（2022年）、同「大名華族山内豊範の日記 明治六年分」同（7）（2024年）、宇和島伊達文化保存会監修・近藤俊文編『伊達宗城公御日記：「備忘手記」明治二己巳九月五日より同三庚午——日本近代化の基礎を築く——』創泉堂出版（2024年）が挙げられる。これらの業績も含め、華族（子弟）の日記に関する研究状況については、内山一幸先生（大阪経済大学）より懇切なご指導を賜った。心よりお礼申し上げる。
- (55) 近衛文麿『清談録』千倉書房（2015年復刊・原著1936年）6-7頁。
- (56) 英麿の日記は羽賀・前掲注（1）でも重要な資料として使用されており、明治37年日記も、英麿の活動を明らかにするために用いられている（142-147頁）。
- (57) ドイツ語の読解にあたっては、阪上眞千子先生（甲南大学）、林真貴子先生（名古屋大学）より懇切なご指導を賜った。心よりお礼申し上げる。
- (58) 熊本細川家分家長岡家当主。承昭の弟。
- (59) 肥後熊本細川家当主。承昭の甥。英麿と照子の結婚式では媒酌を務めた（羽賀・前掲注（1）186頁）。
- (60) 元弘前藩士。元日銀理事、元式武官。
- (61) 元弘前藩士。青山学院院長。
- (62) 元弘前藩士。大審院検事。
- (63) 元弘前藩士の子。日本新聞社社員。
- (64) 飯田巽の長男。著述家。
- (65) 静岡徳川家（元将軍家）当主。英麿の義兄。
- (66) 熊本細川家分家細川家当主（男爵）。承昭の甥（護成の弟）。
- (67) 加賀金沢前田家前当主利嗣の妹。
- (68) 父忠房の妻（島津斉彬の養女）。

資 料

- (69) 霞会館華族家系大成編輯委員会編・前掲注(4) 95頁は、英麿の誕生日を明治5年2月25日とするが、羽賀・前掲注(1) 1頁が記す2月29日が正しい。
 - (70) 文麿は当時学習院中等科に在学。
 - (71) 元弘前藩士。衆議院議員。
 - (72) 元弘前藩家老。
 - (73) 屋島の戦いで有名な那須与一を先祖に持つ那須家当主(東京大学史料編纂所所蔵『下野那須家譜』〈<https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/list/idata/400/4175/675?m=limit&p=3&n=20&db=01>〉)(最終閲覧日:2026年5月13日)。母は津軽順朝の娘(篠村正雄「弘前・黒石津軽家の両敬について」弘前大学國史研究(138)、2015年、31頁)。姉飛佐子は、柳澤保恵の実兄で、越後黒川柳澤家当主(子爵)光邦の妻。2人の娘である斐子は、陸奥黒川津軽家当主(子爵)類橘(順朝の孫)に嫁した。津軽家と那須家との関係は、第四代藩主信政の三男政直が那須家の養嗣子(資徳)になったことに始まる。資毅は一時東京の津軽家屋敷に同居し、のちに那須家は弘前に移住した(岡崎寛徳『改易と御家騒動』同成社、2007年、202頁)。
 - (74) 肥後熊本細川家前当主で、承昭の兄である細川護久の妻(鍋島直正の娘)。
 - (75) 篤麿の2人の妻(先妻衍子、後妻貞子)は姉妹で、当主である利為の叔母にあたる。
 - (76) 肥前佐賀鍋島家当主(侯爵)直大の娘。
 - (77) 神戸税関鑑定官。
 - (78) 元津軽藩士。津軽家家扶。英麿と理喜子の教育係で、英麿留学時にはベルリンまで付き添った。
 - (79) 司法属。
 - (80) 田安德川家当主(伯爵)。
 - (81) 元内閣総理大臣。
 - (82) 明治病院院長。ボン大学留学(1891年夏学期-1892年冬学期)、ベルリン大学留学(1893年夏学期-同冬学期)(最終閲覧日:2026年5月16日)。
 - (83) 明治病院外科部長(醫海時報(556)、1905年、172頁)。ベルリン大学留学(1896年冬学期)(最終閲覧日:2026年5月16日)。
 - (84) 元弘前藩士の子。弁護士。修養社は、当時東京帝国大学法科大学の学生であった平澤が、本多庸一ら津軽出身有力者を説いて創立した在京学生のための寄宿舎である(宇野要三郎「平澤君と修養社」山本邦之助編『平澤均治君を憶ふ』、1922年、125-128頁)。
 - (85) Emmerich Graf von und zu Arco auf Valley。
 - (86) 海軍大学校教授(財政学者)。「早稲田人名データベース」〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22
- (阪大法学) 76 (2-318) 660 [2026. 7]

- 862:1%22]&lang=jp)」（最終閲覧日：2026年5月16日）。ベルリン大学に留学し（1895年冬学期-1897年冬学期）、1897年に博士論文（*Die Warenpreisbewegung in Japan seit dem Jahre 1875, ihre Ursachen und ihre Einwirkungen auf die Volkswirtschaft* 〈「1875年以降の日本の物価変動、その原因と国民経済への作用」〉）を提出して学位を取得した（最終閲覧日：2026年5月16日）。英麿とは、留学中隣室に住んでいた縁で親しくなった（津軽・前掲注（12）14-15頁）。
- (87) 出雲松江松平家当主（伯爵）。先妻は細川護久の娘（護成の妹、護立の姉）、後妻は薩摩鹿児島島津家当主（公爵）忠重の妹。妻充子の妹である知子は徳川達孝の妻、正子は徳川家正の妻。
- (88) 元弘前藩士の子。外務次官。
- (89) 忠熙は明治31（1898）年3月に亡くなった。
- (90) 男爵。式部長。
- (91) 元弘前藩士の子。東京女子高等師範学校教授（生物学者）。
- (92) 早稲田大学講師（哲学者）（早稲田人名データベース〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22674;1%22}&lang=jp)〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。ベルリン大学留学（1902年冬学期）（2026年5月16日）。
- (93) 早稲田大学講師（経済学者）（早稲田人名データベース〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22681;1%22}&lang=jp)〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。ベルリン大学留学（1902年夏学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (94) 元弘前藩士。佐藤愛麿（のちアメリカ駐劄特命大使、宮中顧問官）の養父。
- (95) 元弘前藩士の子。津軽家家扶。
- (96) 台湾総督府民政長官。
- (97) 元在韓国公使館弁理公使。
- (98) 元弘前藩士。衆議院議員。
- (99) 達孝の弟。紀伊和歌山徳川家当主（侯爵）茂承の養嗣子。
- (100) 伊予吉田伊達家当主。
- (101) 家達の子。英麿の甥。
- (102) 東京高等師範学校教授（地理学者）。明治31年11月からの留学にあたって、英麿がかつて寄寓したボン大学教授ヨハネス・ユストゥス・ライン（Johannes Justus Rein）に師事した（「略年譜」山崎直方『山崎直方論文集 後編』古今書院、1931年、25頁）。
- (103) 東京帝国大学理科大学教授。ベルリン大学留学（1898年冬学期-1899年冬学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (104) 東京帝国大学医科大学教授。ベルリン大学留学（1892年冬学期-1893年冬学期）

資 料

- (最終閲覧日：2026年5月16日)。
- (105) 尊生医院院長（鈴木要吾編『松山棟庵先生伝』松山病院、1943年、217頁）。ベルリン大学留学（1896年冬学期、1899年冬学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (106) 東京帝国大学文科大学教授。ベルリン大学留学（1898年冬学期-1899年夏学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (107) 元弘前藩士。衆議院議員。
- (108) 塩業家。塩業家野崎武吉郎の東京別邸執事。
- (109) のち第一生命保険副支配人（第一生命保険相互会社五十年史編纂史編『第一生命五十五年史』第一生命保険相互会社、1958年、資料153頁）。
- (110) 侍医。休職東京帝国大学教授。
- (111) 建築家。コンドルは英磨留学時にベルリンまで送り届けた。
- (112) 「ジョサイア・コンドル略年譜」鈴木博之＝藤森照信＝原徳三監修『「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録（増補改訂版）』建築画報社（2009年）238頁。
- (113) 日露戦争に派遣された観戦武官（ベルリン国立図書館のCrossAsia「Meiji-Portraits」〈<https://crossasia.org/meiji-portraits/F.html?lang=de>〉）（最終閲覧日：2026年5月18日）。正確には、この当時フェルスターは少佐ではなく中佐である。
- (114) ドイツ東洋文化研究協会メンバー。明治40年から大正3年まで会長を務めた（公益社団法人オーアーゲー・ドイツ東洋文化研究協会ウェブサイト〈<https://oag.jp/people/rudolf-lehmann/>〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。技術者として来日後、京都や東京でドイツ語教師をし、当時は貿易会社に勤務していた（Hoffmann, Gerd, „Rudolph Lehmann (1842-1914) – ein Lebensbild Langjähriger Vorsitzender und Ehrenmitglied der OAG“, *OAG Notizen September 2006*, S. 17-39）。
- (115) 寺島宗則の子。
- (116) 池田は、野津道貫伯爵（のち侯爵）の娘輝子と結婚した。
- (117) 元第二高等学校教授。ボン大学留学（1893年夏学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (118) 元弘前藩士の子。工藤行幹の養嗣子。
- (119) 近衛家家令（羽賀・前掲注（1）130頁）。
- (120) 「相撲だけは幼い日からずっと見て居り、また青森県から出身の力士も多かったので、その人びとの居る部屋、高砂系統の力士を聞いておかしい程ほめる。そして場所ごとの番附など大事に保存してあり、留学中も東京から送ってもらったりしてゐた」（津軽・前掲注（12）24頁）。
- (121) 明治33（1900）年6月6日没。

- (122) 元学習院教授。ベルリン大学留学（1888年冬学期-1889年冬学期、1890年冬学期-1893年夏学期、1897年夏学期-1899年夏学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (123) 枢密顧問官杉孫七郎子爵の子。のち青木周蔵子爵の養嗣子となり、その跡を継いだ。ベルリン大学留学（1895年冬学期-1896年冬学期、1899年夏学期）。
- (124) 外交官。元在ドイツ公使館二等書記官。ベルリン大学聴講（1900年夏学期）（Hartmann, Rudolf. *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914*. 2., überarbeitete und ergänzte Auflage. Berlin: Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin, 2000. S. 89）。妻は実業家である初代田中平八の娘勝子（小林郊人編著『天下の糸平：糸平の祖先とその子孫』信濃郷土出版社、1967年、61頁）。
- (125) 初代田中平八の孫（同上61頁）。
- (126) 初代田中平八の三男（同上61頁）。製鉄を学ぶためにシャルロッテンブルク工科大学（Königliche Technische Hochschule Charlottenburg）に留学（井手・柴田編・前掲注（25）117頁）。明治39（1906）年12月に高田慎蔵の娘と結婚して養子となり、高田商會を継いだ。
- (127) 国立伝染病研究所所長。
- (128) 肥前唐津小笠原家当主。海軍省軍令部参謀（海軍少佐）。
- (129) 早稲田大学理事（早稲田人名データベース〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22686;1%22;&lang=jp〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (130) 元内閣総理大臣。
- (131) 肥前平戸松浦家当主（伯爵）松浦詮の子で大隈重信の養嗣子。早稲田大学教授（早稲田人名データベース〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22667;5%22;&lang=jp〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (132) 元弘前藩士の子。東亜同文會事務局長。
- (133) 枢密院議長。元内閣総理大臣。
- (134) 和泉岸和田岡部家当主（子爵）。日本俱樂部会長。
- (135) 元弘前藩士。
- (136) 退職判事（元東京控訴院判事）。近衛家家職。
- (137) 元弘前藩士。
- (138) 元弘前藩士の子。珍田捨巳の従弟（成田末五郎「船水武五郎伝：製紙界の功勞者」弘前大学國史研究（50）、1968年、74頁）。
- (139) 元弘前藩家老山中逸郎の娘。佐藤清衛の養嗣子愛麿の妹。
- (140) のち山中逸郎の孫千之（外交官）の妻。
- (141) 塩業家。貴族院議員（多額納税者）。

資 料

- (142) 元衆議院議員。野崎武吉郎家理事。
- (143) ヴィルヘルム・キーンツル (Wilhelm Kienzl) のオペラ *Der Evangelimann* (「聖句歌い」) で歌われる有名なフレーズ (Selig sind, die Verfolgung leiden um der Gerechtigkeit willen, denn ihrer ist das Himmelreich 〈「正義のために迫害を被る者は幸いかな、なぜなら天の御国は彼らのものだから」〉)。英麿は、「日本在来の芝居の不自然な場面は嫌はれ、常に「オペラ」はよかつたが日本の芝居は徹底しないので見て居るうちにいやになる (ルビは省略…著者注)」と述べていたという (今周而「故伯爵の逸事逸話」陸奥の友 (6)、58頁)。
- (144) 「マカーロフ中将略伝」マカロフ『海軍戦術論〔第3版〕』水交社 (1905年)。
- (145) 徳川宗家分家徳川家当主 (男爵)。徳川慶喜の子。
- (146) 那須資毅の弟。
- (147) 東京帝国大学法科大学教授。ベルリン大学留学 (1898年冬学期-1899年夏学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (148) 学習院教授 (言語学者)。ベルリン大学留学 (1901年冬学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (149) 東京帝国大学法科大学教授。ベルリン大学留学 (1897年夏学期-同冬学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (150) 亀山美和子『近代日本看護史 I 日本赤十字社と看護婦』ドメス出版 (1983年) 82頁。
- (151) 実業家。二代目田中平八 (初代平八の養子) (小林編著・前掲注 (124) 61頁)。
- (152) 伊藤博文の養嗣子。のち博邦に改名。明治19 (1886) 年から明治24 (1891) 年にかけて、ドイツで語学および法学研究 (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (153) 外交武官接伴掛 (「歩兵大佐 池田正介 勲績明細書」防衛省防衛研究所所蔵『明治38年9月起 勲績明細書等控綴 大本営陸軍副官』アジア歴史資料センター・レファレンスコード: C06041126000)。
- (154) 後藤象二郎の子。1897年冬学期から1901年冬学期までベルリン大学に留学し、博士論文 (*Die japanische Seeschiffahrt* 〈「日本の海運」〉) を提出して学位を取得した (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (155) 伯爵。
- (156) 芸術家、俳優。
- (157) 伊予宇和島伊達家当主 (侯爵) 宗徳の子。ベルリン大学留学 (1890年夏学期-1891年夏学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (158) 檜麿は、明治37年7月7日に式部官に任ぜられた。
- (159) 三井物産会社参事長。
- (160) 元津軽藩士。佐藤尚武 (のち外務大臣、駐ソビエト連邦大使、参議院議長) の実父。

- (161) 元日本銀行総裁、元東京府知事。貴族院議員。
- (162) 元在ロシア帝国全権公使。
- (163) 『外交時報』編輯人兼発行人（早稲田人名データベース〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22724;1%22&lang=jp〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (164) 東京高等商業学校教授（法学者）。ベルリン大学留学（1898年夏学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (165) 「第57号 明治37年3月27日旅順口第2回閉塞の際 閉塞船福井丸死傷者氏名表」防衛省防衛研究所所蔵『極秘 明治37. 8年海戦史 第1部 戦紀 巻3. 4. 5 付表及付図』（アジア歴史資料センター・レファレンスコード：C05110005900）。
- (166) 樺山資紀伯爵の子。ボン大学留学（1889年冬学期-1890年冬学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (167) ドイツ公使館一等書記官、参事官などを経て、明治39年にファーライの後任として在日ドイツ公使となる。明治39年から40年にはドイツ東洋文化研究協会会長も務める（公益社団法人オーアーゲー・ドイツ東洋文化研究協会ウェブサイト〈<https://oag.jp/people/friedrich-carl-von-erckert/>〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (168) 在日ドイツ公使館訳官見習（「〔1. 自明治三十三年〕／2）兵庫及大阪駐在独国領事フエルゲナンド、クリーン及台湾駐在同国領事フエリックス、ラインスドルフ新任之件 附訳官ワイベルト転任ニ付訳官チール公使館附被命之件 明治三十三年三月」外務省外交史料館所蔵『在本邦各国領事任免雑件／独国之部 第三巻』アジア歴史資料センター・レファレンスコード：B18010280900）。明治37年から39年にかけてドイツ東洋文化研究協会の図書館司書も務める（公益社団法人オーアーゲー・ドイツ東洋文化研究協会ウェブサイト〈<https://oag.jp/people/fritz-august-thiel/>〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (169) 在日ドイツ公使館附外交官補（「39. 独国公使館附外交官補アルフレッド、ウオルフメッテルニヒ任命之件 明治三十六年十二月」外務省外交史料館所蔵『在本邦各国公使館員任免雑件 独国之部／独国之部』アジア歴史資料センター・レファレンスコード：B16080985200）。
- (170) 在日ドイツ公使館訳官見習（「35. 独国司法官見習カル、フホーグト公使館附訳官見習ニ任命之件 明治三十六年三月」外務省外交史料館所蔵『在本邦各国公使館員任免雑件 独国之部／独国之部』アジア歴史資料センター・レファレンスコード：B16080984800）。ドイツ東洋文化研究協会メンバー（公益社団法人オーアーゲー・ドイツ東洋文化研究協会ウェブサイト〈<https://oag.jp/people/karl-vogt/>〉）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (171) 司法次官。英麿が石渡と初めて会ったのは、1887年1月のドイツ到着直後のベ

資 料

- ルリンにおいてであった。瀬岡誠「近衛篤磨と関係集団」社会科学 (54) (1995年) 13頁によれば、石渡は、篤磨「にとってもっとも重要な相互作用をもたらす仲間集団 (peer-group)」である「いわゆる「気のおけぬ連中」」の一人であった。
- (172) 山中逸郎の次男で、のち佐藤清衛の養嗣子。外交官。元在ドイツ公使館一等書記官。
- (173) 外交官。元ドイツ公使館一等書記官。
- (174) 学習院教授 (法学者)。ベルリン大学留学 (1897年夏学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (175) 東京帝国大学法科大学教授。ベルリン大学留学 (1899年冬学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (176) 金杉耳鼻咽喉科病院病院長 (醫海時報 (447)、1903年、33頁)。
- (177) 東京帝国大学医科大学助教授 (東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 從明治三十七年至明治三十八年』、1904年、113頁)。ベルリン大学留学 (1895年冬学期-1899年夏学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (178) 音響学者。元日本鉄道株式会社技師 (伊藤完夫『田中正平と純正調』音楽之友社、1968年、91頁)。ベルリン大学留学 (1884年冬学期-1887年夏学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (179) 学習院教授 (法学者)。
- (180) 学習院教授 (法学者)。ベルリン大学留学 (1898年冬学期-1901年夏学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (181) 学習院教授 (言語学者)。1901年12月から翌年3月頃までベルリンに滞在 (泉健「北里闌「日本の演劇」ベルリン、1901」和歌山大学教育学部紀要 人文科学 (59)、2009年、13頁)。
- (182) 文学者。帝国独逸学会独逸語学校教授、早稲田大学講師。1900年9月から1902年9月までベルリン大学附属東洋語学校講師を務める (「年譜」巖谷大四『波の跫音』文藝春秋、1993年、291-292頁)。
- (183) 通信参事官。のち住友家総理事。
- (184) 外交官。元在ドイツ公使館外務書記生。ベルリン大学留学 (1898年冬学期) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (185) 早稲田大学講師 (哲学者) (「早稲田人名データベース」〈https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg=%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22733;1%22&lang=jp〉) (最終閲覧日: 2026年5月16日)。
- (186) 外交官。元在ドイツ公使館二等書記官。
- (187) 同年8月死去 (「年譜」松井桃楼編『市川左團次』、1941年、10頁)。妻の照子は、「芝居とかいろいろの演芸にしても、見に行くのは大変好きであったけれど、特に誰を最良にするのではなく、其時どきのその人の演技をたのしむのであった
- (阪大法学) 76 (2-324) 666 [2026. 7]

た」（津軽・前掲注（12）24頁）と述べている。

- (188) 津軽出身の元小結。明治35（1902）年1月場所をもって引退し立田山親方となる（景山忠弘＝小池謙一編著『古今大相撲力士事典』国書刊行会、1989年、215頁）。
- (189) 元横綱。明治34（1901）年1月場所をもって引退し二十山親方となる（同上150頁）。
- (190) 京都帝国大学法科大学教授。ベルリン大学留学（1899年冬学期-1900年夏学期）（最終閲覧日：2026年5月16日）。
- (191) 近衛家家令。養子の河原田稼吉は、文麿の側近となる。
- (192) 近衛家家扶（矢部貞治編著『近衛文麿 上』弘文堂、1952年、29頁）。
- (193) 老女による養育から脱するために篤麿が雇い入れた文麿の教育係（同上23頁）。
- (194) 明治34年1月に巖谷小波が師匠となりベルリンで発足した俳句会で、帰国後も続いた。英麿（俳号合浦）以外に日記に登場する人物では、清水澄、倉知鉄吉、盧百寿、田中釜吉、中村進午、岡田朝太郎、久保無二雄、北里闌、池田龍一、建部遯吾、山田三良、入澤達吉、志田鉦太郎が関係者であった（「名録」加藤正治編『伯林集 白人集』1934年、1-4頁）。
- (195) 津軽家家扶（外崎覚「本書の編輯に就きて」同『弘前城主越中守津軽信政公』、1902年、4頁、羽賀・前掲注（1）220頁）。
- (196) 弘前藩士の子。医師。帰弘し開業。
- (197) 伊勢津藤堂家当主。
- (198) 明治神宮監修・宮内庁『昭憲皇太后実録 下巻』吉川弘文館（2014年）248頁（明治37年7月25日条）。
- (199) 子爵。皇后宮大夫。
- (200) 篤麿の娘。のち大山柏侯爵の妻。
- (201) 篤麿の息子。近衛庶流水谷川家当主（男爵）忠起の養嗣子となり、その跡を継いだ。

〔謝辞〕 津軽英麿日記の閲覧、翻刻を許可して下さった弘前市教育委員会に心よりお礼を申し上げます。